

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(27)

地方特定道路整備工事(志布志工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 小 迫 遺 跡

1998年2月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

## 序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称されるとおり、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに200か所以上の「周知の遺跡」があります。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業或いは宅地開発等の開発行為により、発掘調査等が実施され、貴重な資料を提供するとともに、遺跡の性格等が解明されつつあります。

本書は、平成7～9年度に実施しました、地方特定道路整備工事（志布志工区）の小追遺跡の発掘調査報告書であります。

小追遺跡からは、縄文時代晩期を主体とする遺物・遺構が検出されました。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり、指導者や作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた作業員の皆様、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成10年2月

志布志町教育委員会

## 例　　言

1. この報告書は、平成7～9年度に実施した地方特定道路整備工事（志布志工区）に伴う小迫遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 全面発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査における測量・写真撮影は、主に小村が行い、調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・教示を受けた。
4. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
5. 遺物番号については、通し番号とし、挿図・図版とも一致している。
6. 出土遺物は、志布志町教育委員会で一括保管し、公開展示する予定である。
7. 本書の執筆および編集は主に小村が行った。
8. 遺跡の調査、遺物の整理にあたり、次の方々に御教示、御協力賜った（50音順）。
 

堂込秀人、東和幸、相美伊久雄、坂元裕樹、杉尾木の実、生重美恵子

## 報告書抄録

ふりがな	こざこ いせき				
書名	小迫遺跡				
副書名	地方特定道路整備工事（志布志工区）に伴う発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第27集				
編著者名	小村美義				
編集機関	志布志町教育委員会				
所在地	〒899-7192 鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号 0994-72-1111				
発行年月日	平成10(1998)年2月28日				
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード-遺跡番号 北緯°'\"東経°'\"		調査期間 調査期間	調査原因
小迫遺跡	鹿児島県 曾於郡 志布志町 田之浦字小 迫	68-87 131° 08' 16" 31° 32' 31"		平成8年 7月8日～ 平成9年 2月19日	約2,080m <sup>2</sup> 道路整備工 事に伴う全 面発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小迫遺跡		縄文時代 (早・後・晚期) 弥生時代 古代	土坑	指宿式土器 市来式土器 入佐式土器 黒川式土器外	

## 本文目次

序文 例言 報告書抄録	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第Ⅱ章 発掘調査	2
第1節 基本土層	2
第2節 調査の概要	9
第3節 検出遺構	13
第4節 出土遺物	13
第Ⅲ章 まとめにかえて	53
挿図目次	
第1図 土層柱状図	2
第2図 遺跡位置図	3
第3図 調査区域図	4
第4図 調査区域及びグリッド配置図	5
第5図 遺物出土状況図	6
第6図 土坑実測図（1～4号）	7
第7図 縄文早・中・後期土器	9
第8図 縄文晚期土器（1）（深鉢形）	10
第9図 縄文晚期土器（2）（深鉢形）	11
第10図 縄文晚期土器（3）（深鉢形）	12
第11図 縄文晚期土器（4）（深鉢形）	13
第12図 縄文晚期土器（5）（深鉢形）	14
第13図 縄文晚期土器（6）（深鉢形）	15
第14図 縄文晚期土器（7）（深鉢形）	16
第15図 縄文晚期土器（8）（深鉢形）	17
第16図 縄文晚期土器（9）（深鉢形）	18
第17図 縄文晚期土器（10）（深鉢形）	19
第18図 縄文晚期土器（11）（深鉢形）	20
第19図 縄文晚期土器（12）（深鉢形胴部）	21
第20図 縄文晚期土器（13）（深鉢形胴部）	22
第21図 縄文晚期土器（14）（深鉢形胴・底部）	23
第22図 縄文晚期土器（15）（半粗半精）	24
第23図 縄文晚期土器（16）（半粗半精）	25
第24図 縄文晚期土器（17）（半粗半精）	26
第25図 縄文晚期土器（18）（半粗半精）	27
第26図 縄文晚期土器（19）（半粗半精）	28
第27図 縄文晚期土器（20）（組織痕）	29
第28図 縄文晚期土器（21）（組織痕）	30
第29図 縄文晚期土器（22）（組織痕）	31
第30図 縄文晚期土器（23）（組織痕）	32
第31図 縄文晚期土器（24）（組織痕）	33
第32図 縄文晚期土器（25）（組織痕）	34
第33図 縄文晚期土器（26）（組織痕）	35
第34図 縄文晚期土器（27）（組織痕）	36
第35図 縄文晚期土器（28）（組織痕）	37
第36図 縄文晚期土器（29）（精製）	38
第37図 縄文晚期土器（30）（精製）	39
第38図 縄文晚期土器（31）（精製）	40
第39図 縄文晚期土器（32）（精製）	41
第40図 縄文晚期土器（33）（精製）	42
第41図 縄文晚期（34）（その他）	43
第42図 縄文晚期～弥生土器（35）	44
第43図 縄文晚期石器（36）	45
第44図 縄文晚期石器（37）	46
第45図 縄文晚期石器（38）	47
第46図 縄文晚期石器（39）	48
第47図 縄文晚期石器（40）	49
第48図 縄文晚期～弥生石器（41）	50
第49図 古代土師器・須恵器・土師甕	51
第50図 古代土師甕・土製品	52
表目次	
第1表 土器観察表	54
第2表 編布サイズ別点数総括表	57
第3表 綱目サイズ（c）比較	57
第4表 石器観察表	58
第5表 石器組成表	58
第6表 土師器・須恵器観察表	59
第7表 土師甕・土製品観察表	59

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会(県文化財課)では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、大隅土木事務所(以下、土木事務所)は、志布志町田之浦字小追地内における、地方特定道路整備工事(志布志工区)計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、志布志町教育委員会(以下、教育委員会)に照会した。

これを受けて教育委員会は、当該事業地区の分布調査を実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に「小追遺跡」が存在していることが判明した。

このため教育委員会は、事業実施前に遺跡の範囲・性格等の把握を目的とした確認調査(平成7年5月15日～6月14日)を実施した。

確認調査の結果、縄文時代の遺物を検出した。このことを受けた土木事務所は、設計変更が不可能なことを報告した上で、記録保存を主目的とした全面発掘調査を要望した。

これを受けて教育委員会は、平成8年7月8日から平成9年2月19日まで、全面発掘調査を実施した。

全面発掘調査は、志布志町教育委員会が主体となり、県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得て実施した。

### 第2節 調査の組織

#### 1. 確認調査(平成7年度)

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者 教育長 德重俊二

調査調整社会教育課長 吉松弘文

調査事務社会教育課長補佐 井手南海男

社会教育課係長 新村千秋

調査事務主事 小村美義

主事補 坂元正知

調査担当者 主事 小村美義

#### 2. 全面発掘調査(平成8年度)

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者 教育長 德重俊二

調査事務社会教育課長 吉松弘文

社会教育課長補佐 井手南海男

社会教育係長 新村千秋

主事 小村美義

主事補 坂元正知

調査担当者 主事 小村美義

#### 3. 報告書作成(平成9年度)

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者 教育長 早水秀久

調査調整社会教育課長 渡辺純幸

調査事務社会教育課長補佐 井手南海男

社会教育係長 新村千秋

主事 小村美義

主事補 坂元正知

担当者 主事 小村美義

## 第3節 調査の経過

#### 1. 確認調査(平成7年度)

事業計画区域内の地形等を考慮しながら、新設道路部分を中心として、合計11か所(拡張トレーニング1か所を含む。)のトレーニング(以下、T)を設定し実施した。

確認調査の結果、5Tを除く、すべてのTから縄文時代晩期を主体とする、遺物・遺構を検出した。確認調査は、平成7年5月15日から同年6月14日まで実施した。

#### 2. 全面発掘調査(平成8年度)

全面発掘調査は、平成8年7月8日から平成9年2月19日まで実施した。全面発掘調査の結果、縄文時代(早・後・晩期)、弥生時代、古代の遺物を検出した。また、縄文時代晩期の土坑も検出するに至った。

## 第II章 発掘調査

### 第1節 基本土層

小追遺跡は、西向きの帯状の細長い台地に位置しており、東・南・北側の3方向を標高約200mの低い山に囲まれている。遺跡の標高は約126mである。

I層：客土である。色調・硬さ等により数層に細分される。

個人の造成によるものか、また場所によっては、盛土が厚く堆積している。さらに、大正火山灰が薄く層となっている場所もある。

II層：黒褐色土。古代の遺物が出土する層である。

III層：黄褐色火山灰土。縄文時代後・晚期の遺物包含層である。

ゴマシオ状の火山灰を包含する。舞島起源の「御池」に比定される。場所によっては認められない。

IV層：橙色火山灰土。いわゆる「アカホヤ」と呼ばれる層である。下部にバミスが認められる。

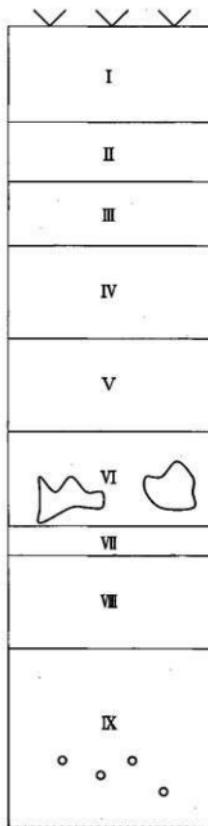
V層：茶黒褐色硬質土。場所によっては、色調・硬さ等により数層に細分できる。

VI層：乳白色硬質土。「薩摩」と呼ばれる層である。場所によっては、色調・硬さ等によりa、b（ブロック）層に細分できる。

VII層：暗茶黒褐色土。縄文時代創早期相当層である。場所によっては認められない。

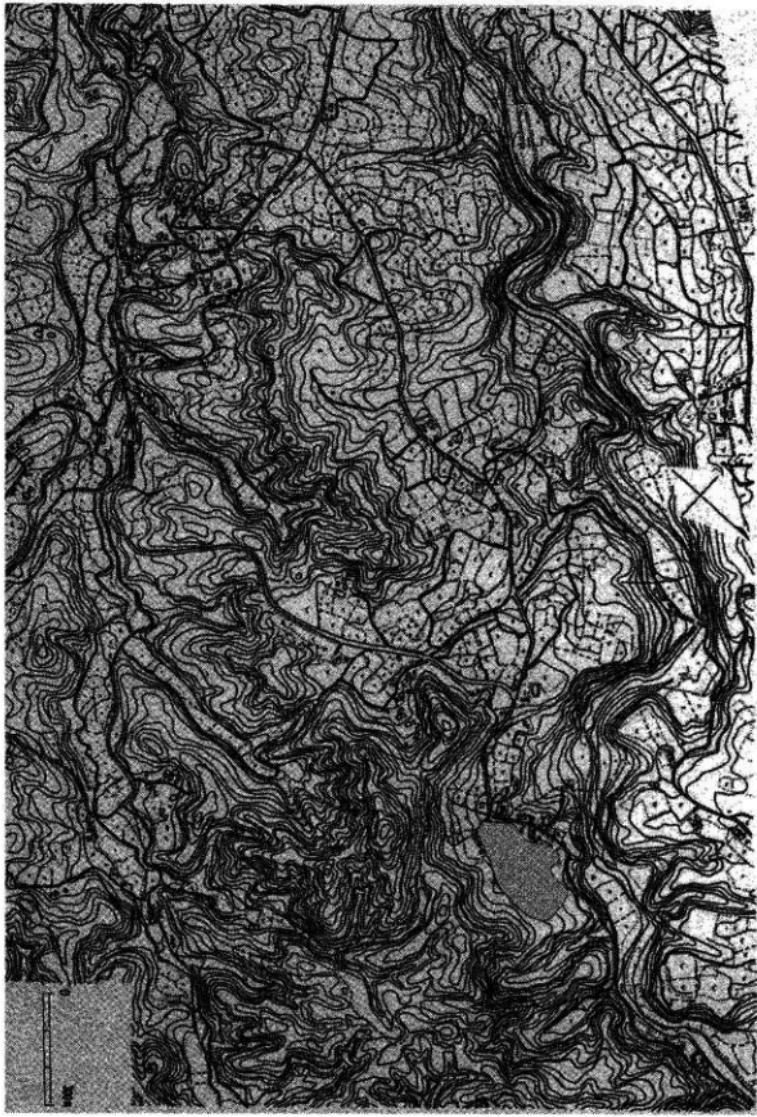
VIII層：茶褐色粘質土。粘質が強い層で、いわゆる「チョコ」と呼ばれている。色調・硬さ等により、数層に細分できる。

IX層：黄灰色火山灰土。「ヌレシラス」と呼ばれる層である。  
多量の黄色軽石を包含する場所も認められた。



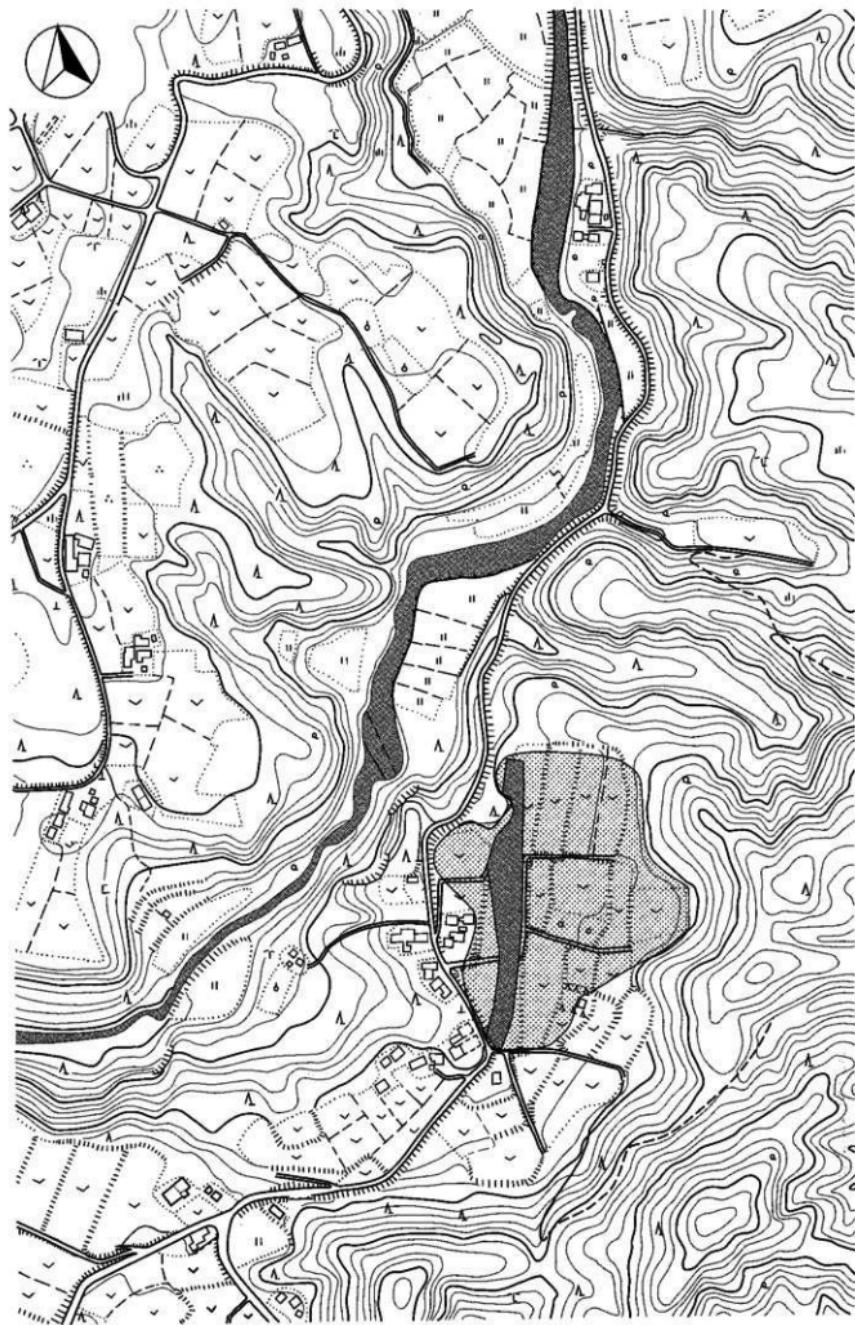
第1図 土層柱状図

第2図 通路位置図

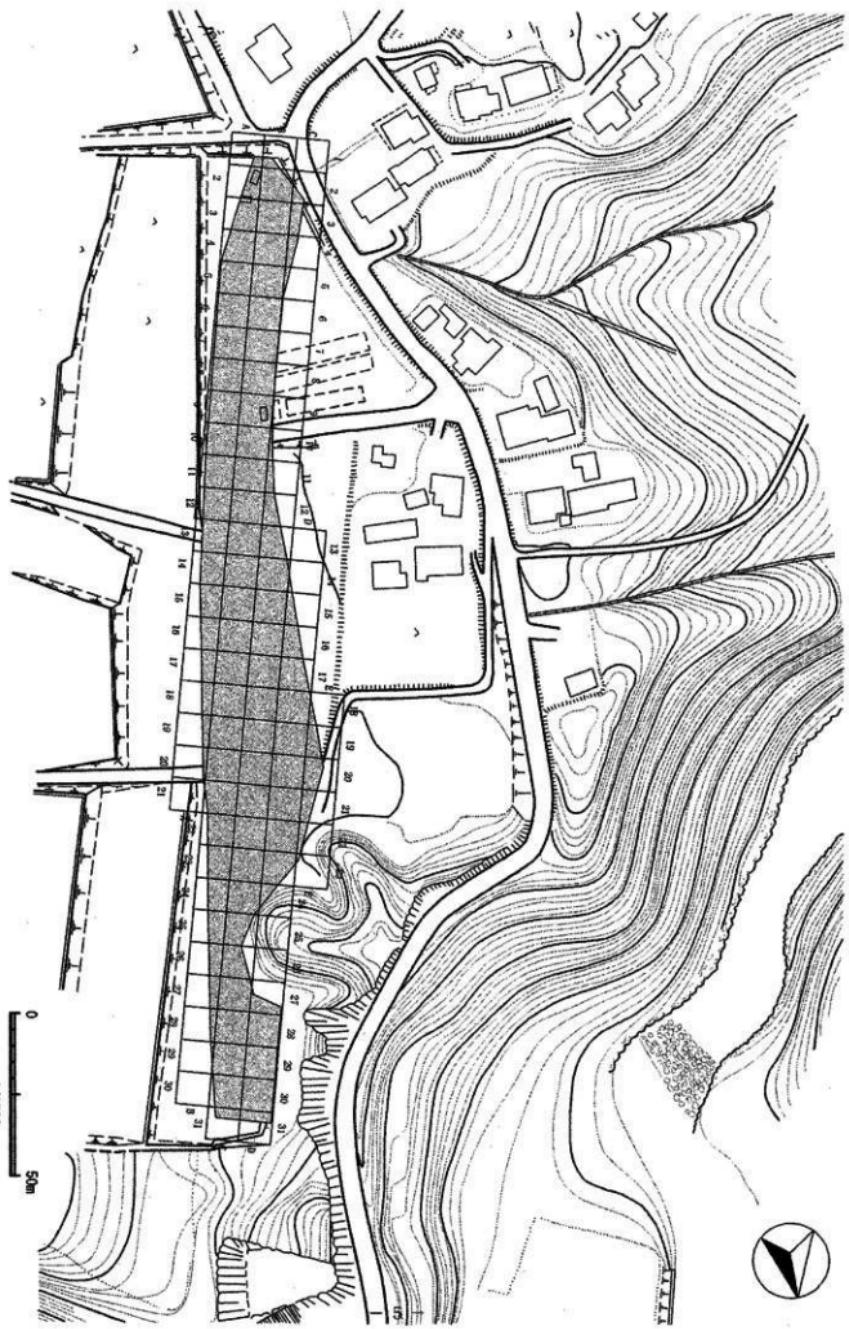


100m  
0 1/5000

第3図 調査区域図

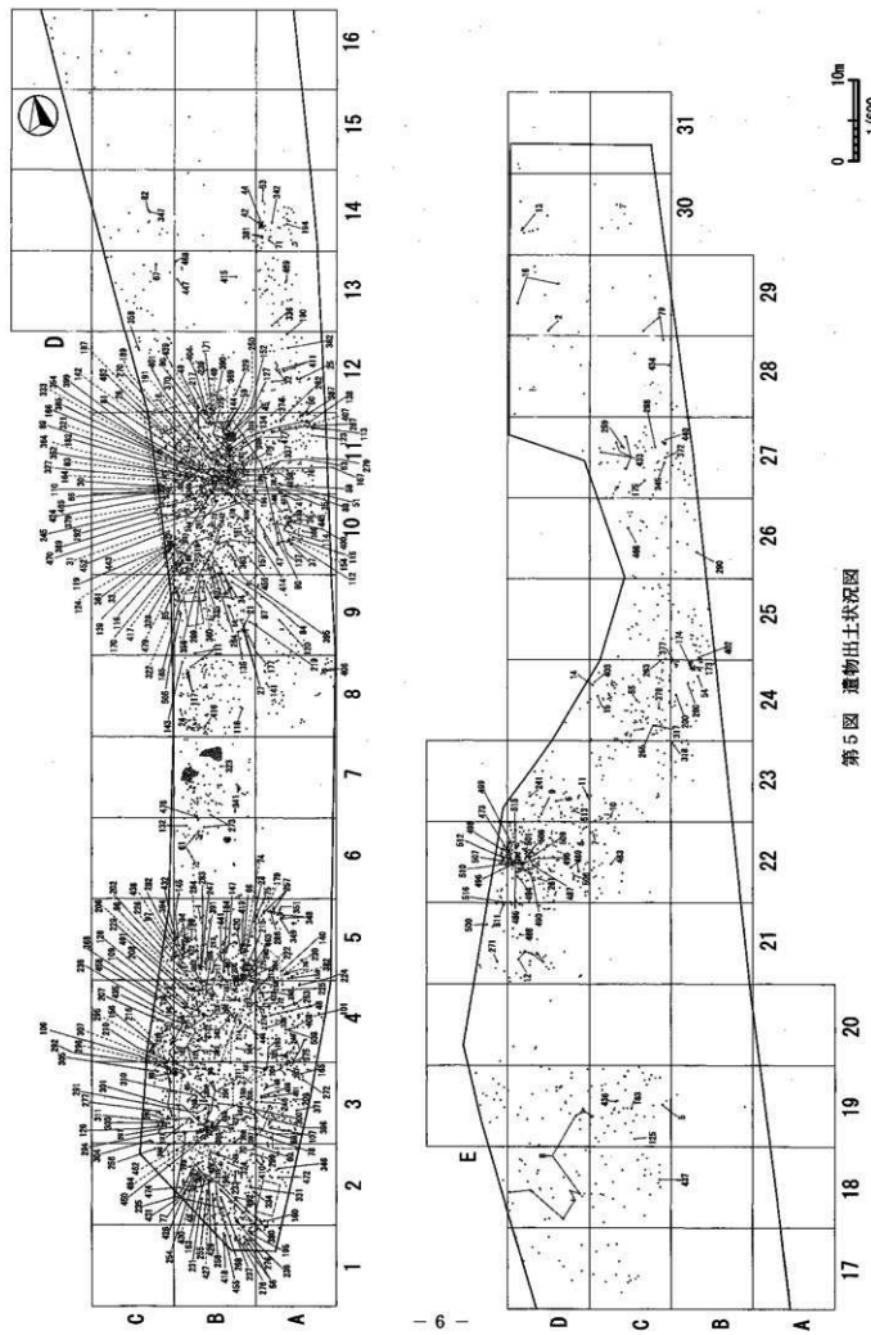


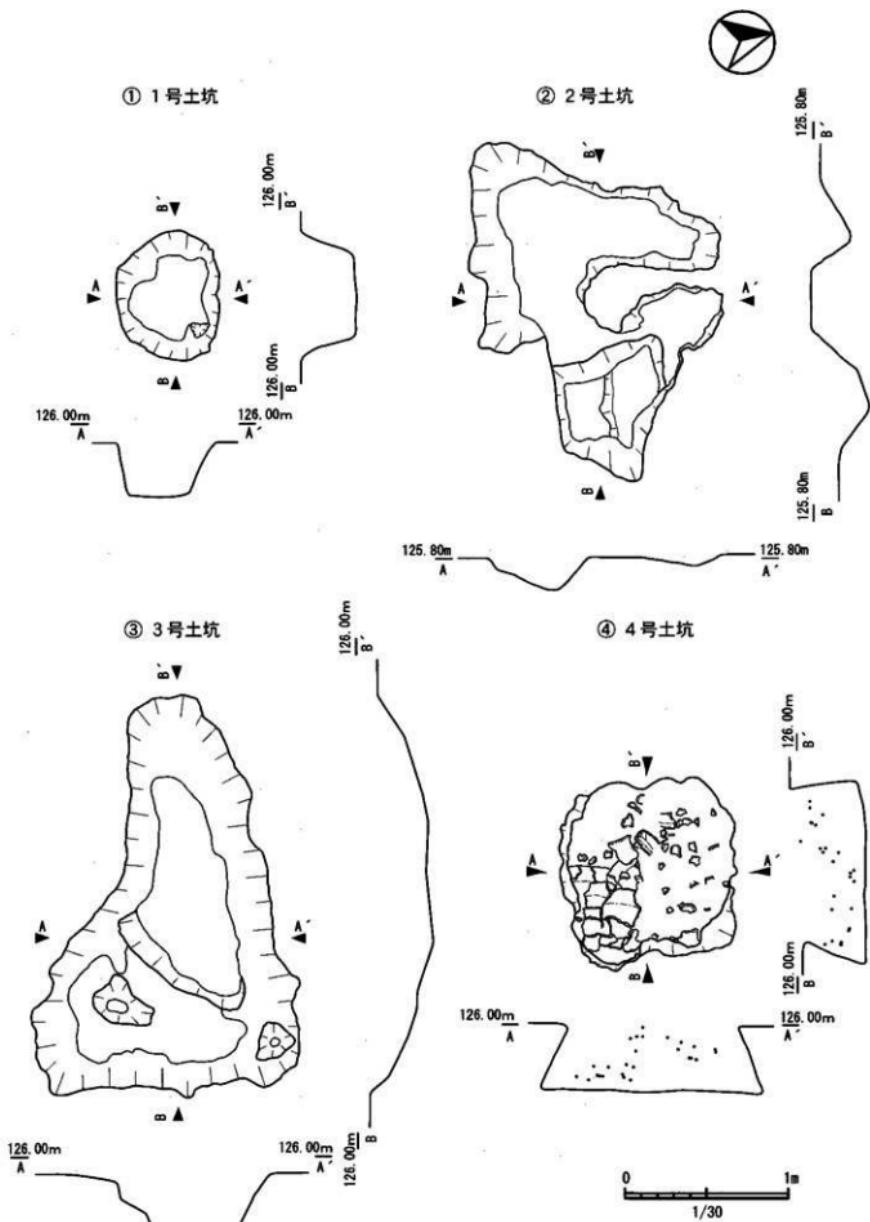
第4図 調査区域及びグリッド配置図



0  
10m  
1/600

第5図 遺物出土状況図





第6図 土坑実測図（1～4号）

## 第2節 調査の概要

平成7年度に実施した確認調査結果から、調査区の南側から全面発掘調査を開始した。客土・無遺物層については、重機により表土除去を行った。表土除去終了後、調査区南側から北側へ、1、2、東側から西側へ、A、Bとし、1-A区、1-B区、2-A区、2-B区……と呼称する10mグリッドを設定し、隨時掘下げた。

全面発掘調査の結果、調査区北側の6・7区を中心に、IV層に掘り込まれた性格不明の土坑4基を検出した。

## 第3節 検出遺構

### 1 性格不明土坑

4基の性格不明土坑の検出面はIV層であった。いずれの土坑からも、縄文時代晩期の遺物が出土した。

#### ①号土坑

6-B区のIV層上面で検出された。長径80cm×短径62cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で35cmである。プランは、概ね橢円形である。

#### ②号土坑

7-B区のIV層上面で検出された。長径228cm×短径160cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で44cmである。プランは不定形である。

#### ③号土坑

7-B区のIV層上面で検出された。長径241cm×短径154cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で43cmである。プランは二等辺三角形である。

#### ④号土坑

11-B区のIV層上面で検出された。長径108cm×短径100cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で40cmである。プランは、概ね橢円形であった。断面形はプラスコ状となる。46の深鉢形土器が出土した。

## 第4節 出土遺物

### 1) 縄文早期土器 (第7図 1~4)

III層等から出土しているので、縄文時代早期土器の一括と考えられるものである。

#### 第1類 (第7図 1)

1は内傾しながら立ち上がる口縁部である。外面には櫛状工具による文様が施される。

#### 第2類-1 (第7図 2)

2は深鉢形土器の底部近くの脚部で、外面に縄文が

施される。

### 第2類-2 (第7図 3、4)

3、4はいずれも変形土器で、4は脚部と考えられる。いずれも金色雲母を含む。

### 2) 縄文後期土器 (第7、8図 5~16)

III層から出土しているが、一部、II層からも出土しており、19~23区を主体として検出された。

### 第3類 (第7図 5)

凹線文系土器と考えられ、板状工具により、器面を削るようにして、施されている。縄文中期土器が。

### 第4類 (第7図 6~12)

細縫凹線文を施すもので、口縁部端部が肥厚気味となるものもある。口縁部に沈線を施すもの(6~10)と施さないもの(11、12)の両方が存在する。

### 第5類-1 (第7図 13)

口縁部の断面形が「く」の字になるものである。内面は施文押印により瘤状となる。

### 第5類-2 (第7図 14、15)

口縁部が強く外反するもので、内面に第5類-1と同様の文様が施される。

### 第6類 (第8図 16)

16は口縁端部が肥厚するもので、外面に沈線が施される。

### 3) 縄文晩期土器 (第8~42図 17~433)

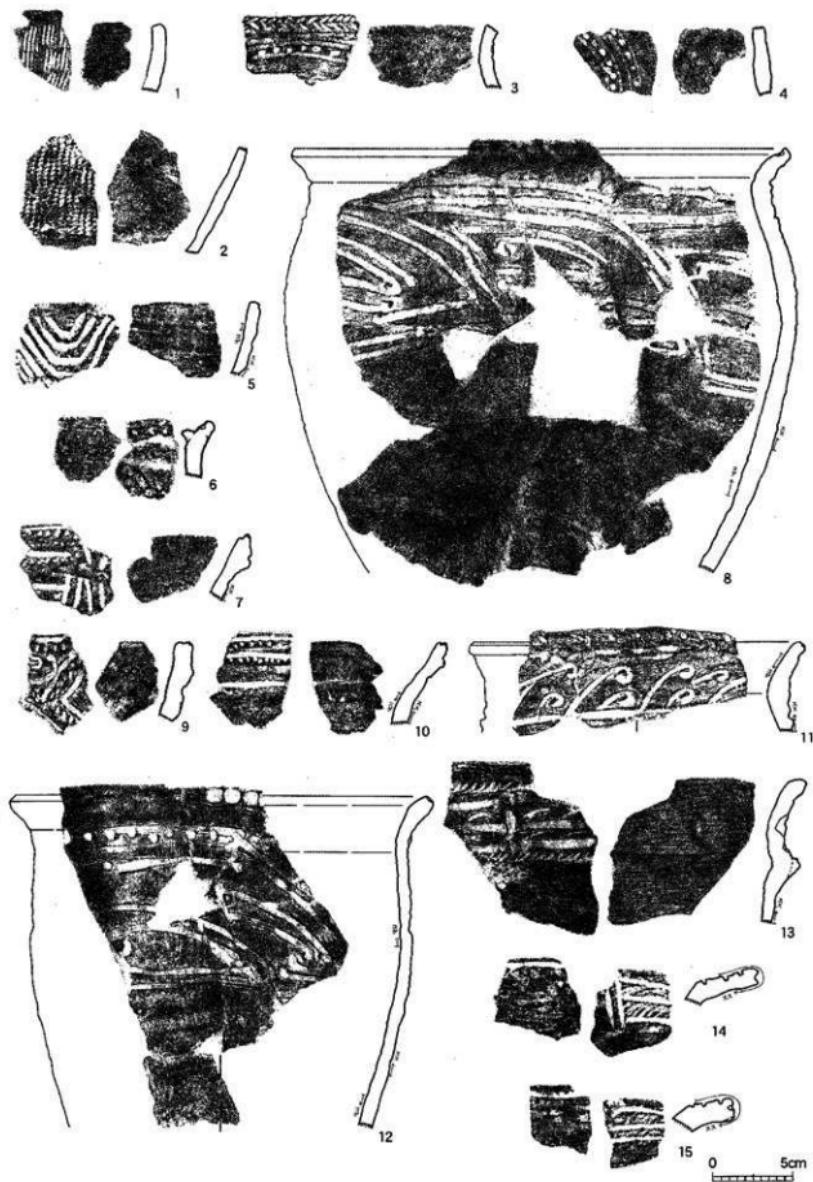
III層を主体として出土しているが、一部、II層からも出土している。本遺跡の出土土器の中で、最も多量に検出されている。1~5区、8~12区、21~24区からの出土量が多い。分類に当たっては、器面調整等に主眼をおきながら、深鉢形土器、半粗半精土器、精製土器の3種類に大別した。

### 第7類-1 (第8図 17~19)

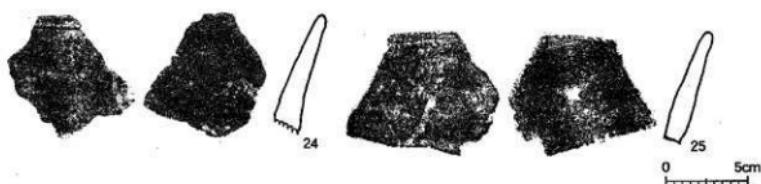
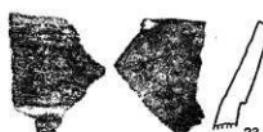
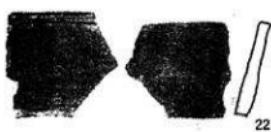
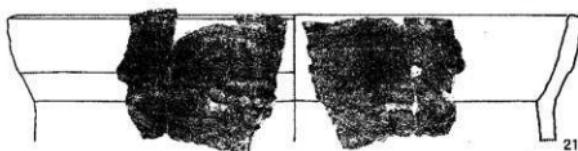
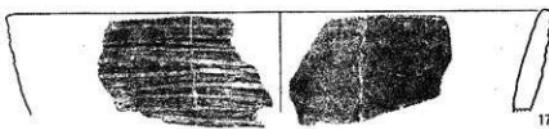
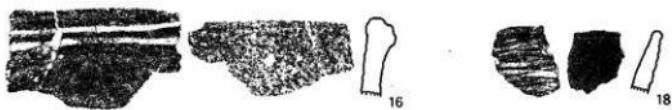
ナデ調整を主体とする深鉢形土器である。一部、ミガキ様の丁寧なナデ調整もみられる。外反する口縁部で、外面に沈線ないしは条度を施すものである。

### 第7類-2 (第8、9図 20~33)

ナデ調整ないしはミガキ調整で、肥厚した口縁部を形成する深鉢形土器である。しかし、肥厚部下に沈線等を施すことによって、みせかけの肥厚帯を形成するものや、口縁部の形成が不明瞭なものも存在する。20、22、29

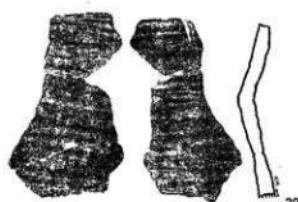
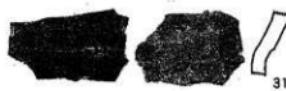
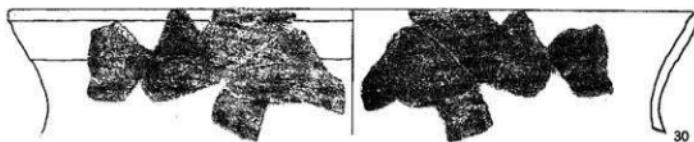
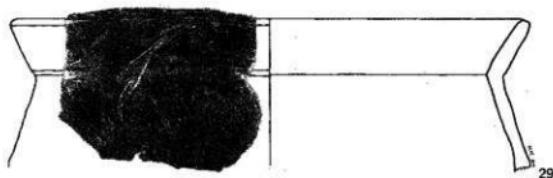
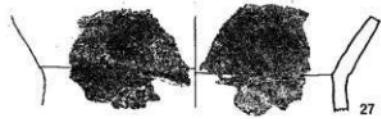


第7図 繩文早・中・後期土器



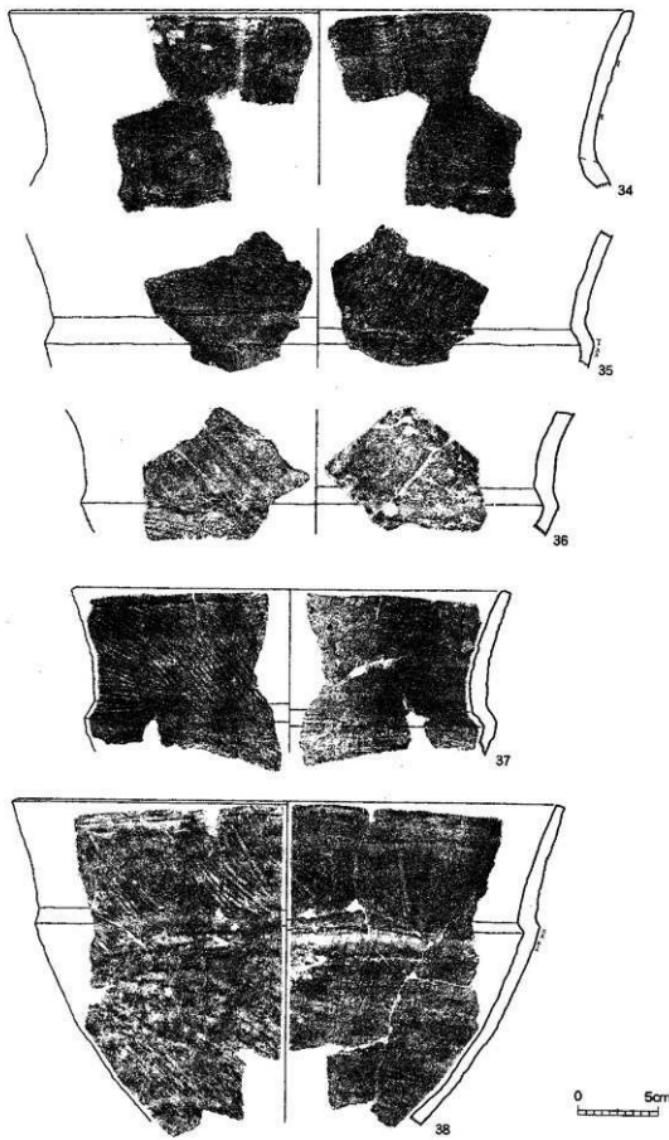
0 5cm

第8図 縄文晩期土器 (1)

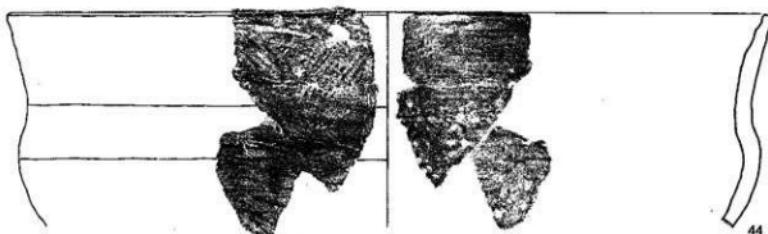
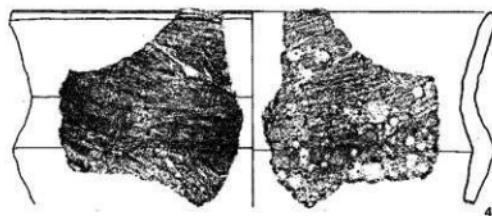
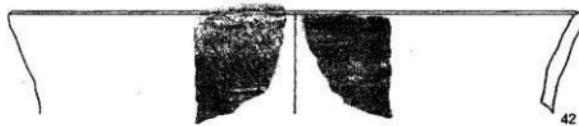
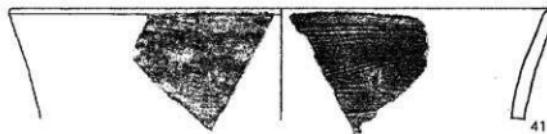
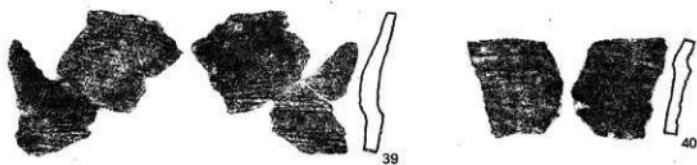


0 5cm

第9図 繩文晩期土器(2)

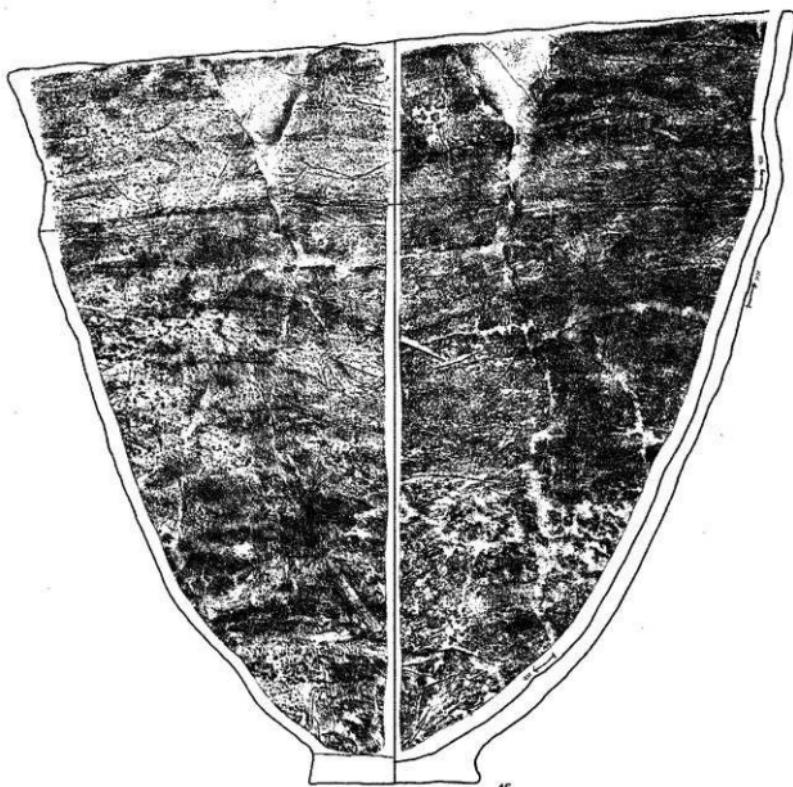


第10図 繩文晩期土器 (3)

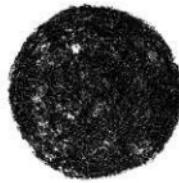


0 5cm

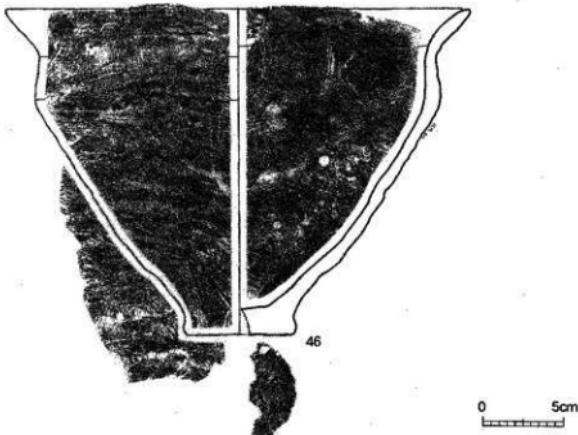
第11図 繩文晩期土器 (4)



45



第12図 繩文晩期土器 (5)



第13図 縄文晩期土器 (6)

の口縁部は内外面ともミガキ調整である。

**第8類-1 (a～d類 第10～17図 34～86)**

条痕ないしはナデ調整を施すものである。なお、口縁部破片の場合、半粗半精土器を含んでいる可能性がある。

**a類 (第10～16図 34～64)**

口縁部が外反するもの (34～46) 、口縁端部が外反するもの (47～51) 、口縁部が内傾し、口縁端部がやや肥厚するもの (52～56) 、口縁部が直口ないしはやや外反するもの (52～64) が存在する。35は金色雲母を含む。

**b類 (第16、17図 65～78)**

調整はa類と同様であるが、口縁端部が肥厚ないしは無則尖突となるものである。

口縁部が内傾するもの (65～69) 、口縁部が直口ないしはやや外反するもの (70～78) の両方が存在する。

67は砂礫を多量に含む。74、75は同一個体である。

**c類 (第17、18図 79～93)**

口縁端部下に突痕ないしは微隆起突帯を形成するものである。口縁部は直口ないしは外反する。93は口縁端部が肥厚し、口唇部が幅広く形成されている。88、89は同一個体である。

**d類 (第18図 94～101)**

孔列文土器で、いずれも孔は貫通しない。串状工具による刺突を施すもの (94～97) 、棒状工具による刺突を施すもの (98～101) の両方が存在する。後者は棒状工具の押圧により、内面は瘤状となる。小破片で器形は不明だが、101は粗製浅鉢の可能性が高い。

**①深鉢胴部 (第19～21図 102～118)**

胴部凹曲部の外面に明瞭な稜線をもつもの (102～104、105～110) 、やや不明瞭なもの (111～116) の両方が存在する。胴部下部には、被熱による赤色化傾向が顕著にみられるものもある。

**②深鉢底部 (第21図 119～141)**

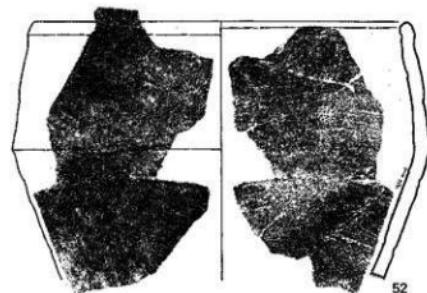
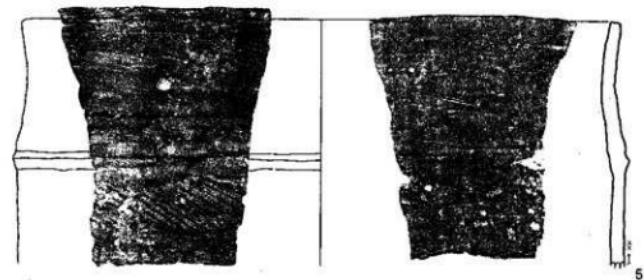
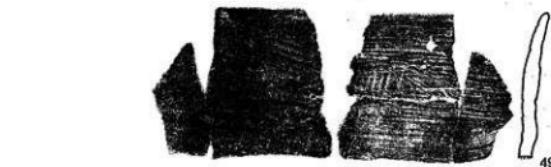
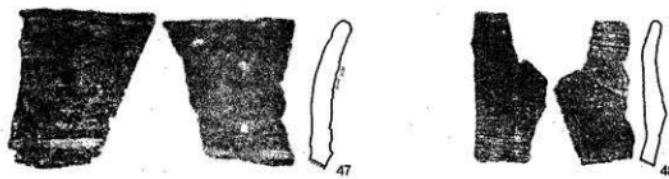
底部外面が張出しをもたないもの (119～122) 、やや張出するもの (123～129) 、張出するもの (130～138) 、張出とともに、やや厚底のもの (139～141) が存在する。

底面に木葉等の圧痕が残るものも存在するが、基本的にナデ調整で仕上げているようである。

**第8類-2 (a～h類 第22～35図 142～316)**

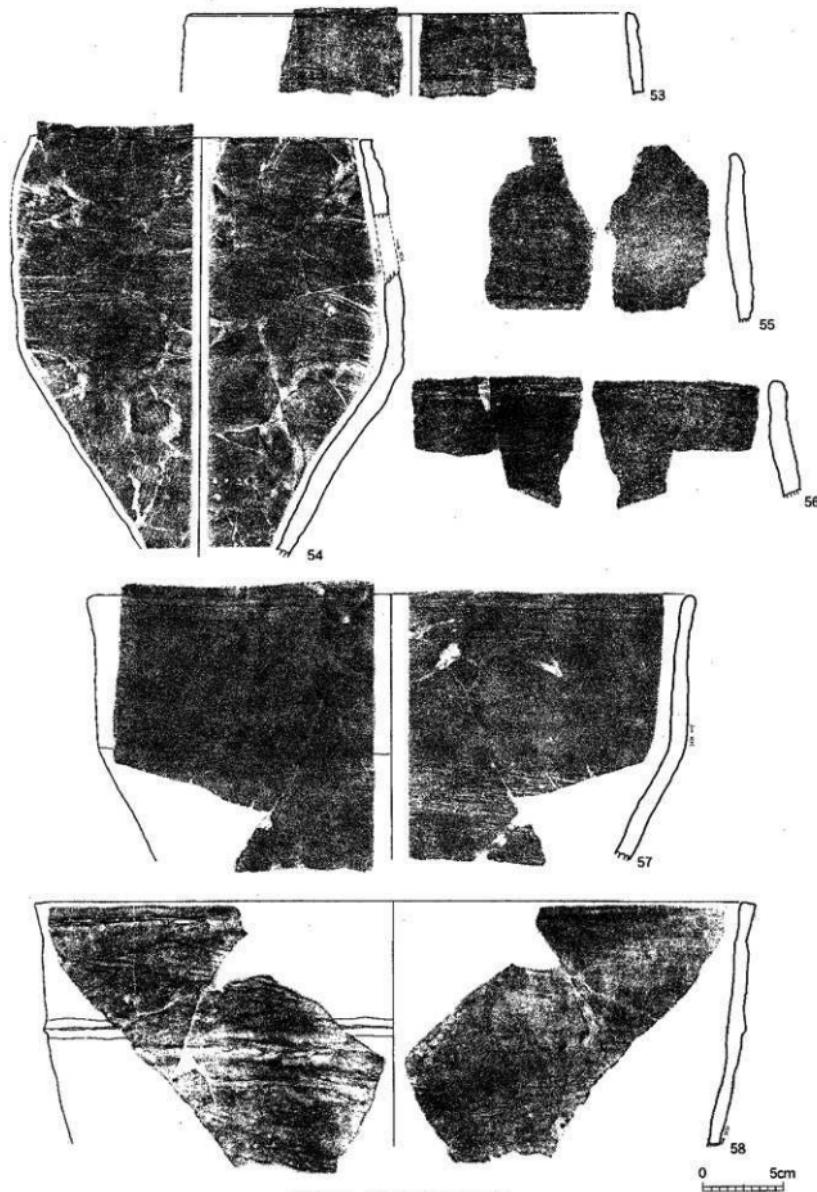
器面調整は外側が条痕ないしはナデ、内面はミガキ調整ないしはナデ調整である。ボウルないしは中華鍋のような器形を呈する半粗半精土器である。

**a類 (第22～24図 142～163)**

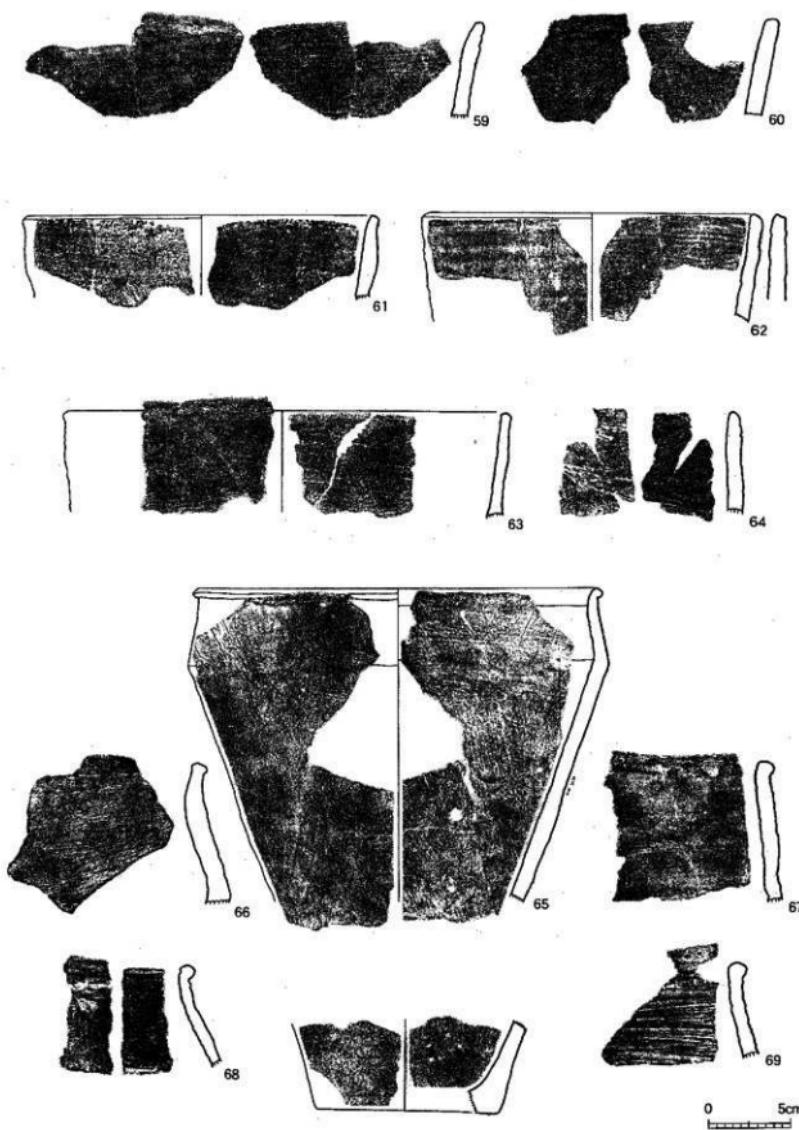


0 5cm

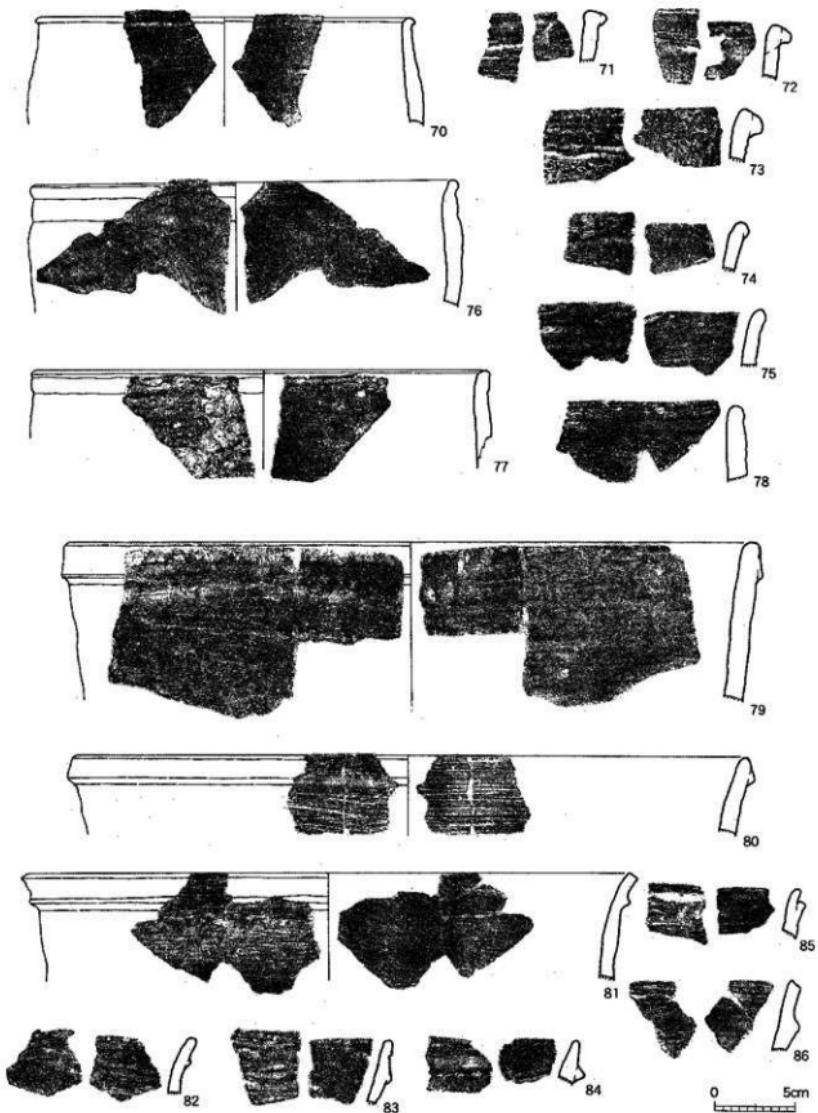
第14図 繩文晩期土器 (7)



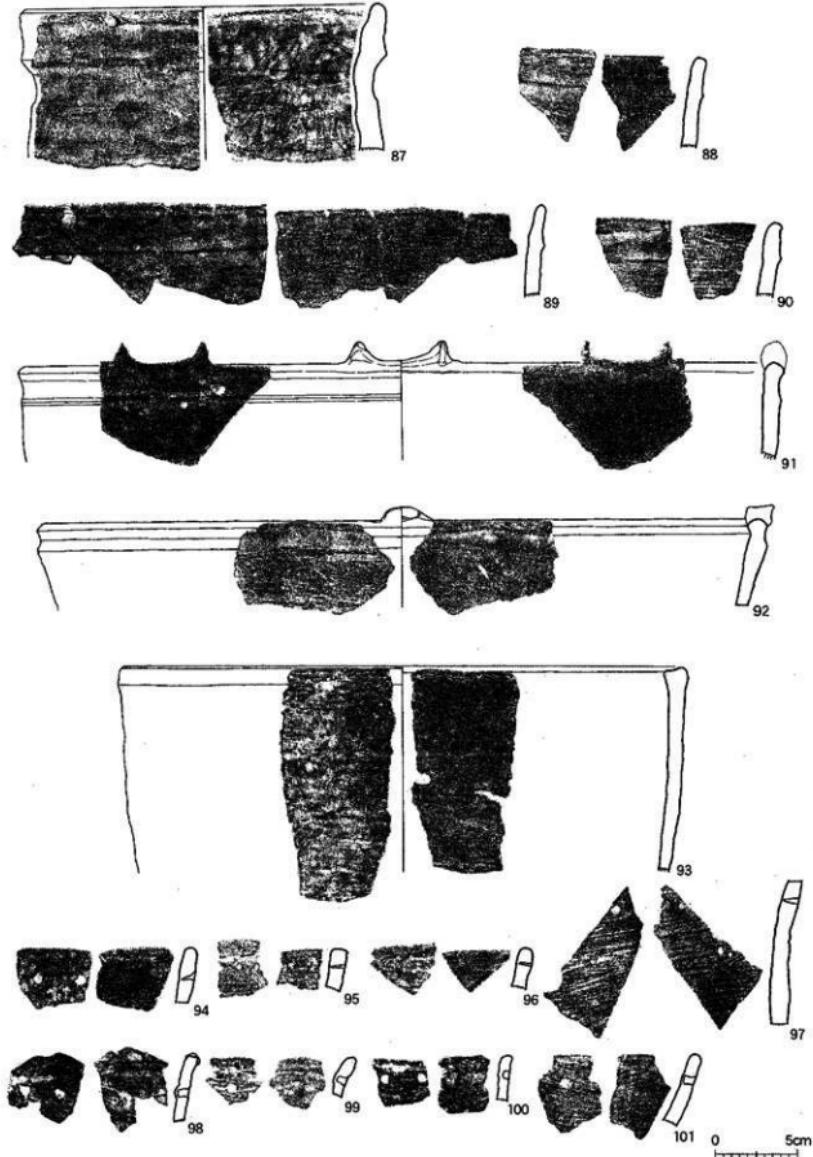
第15図 繩文晩期土器 (8)



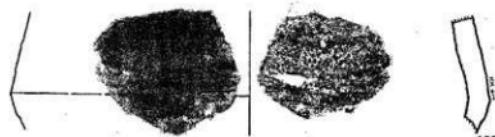
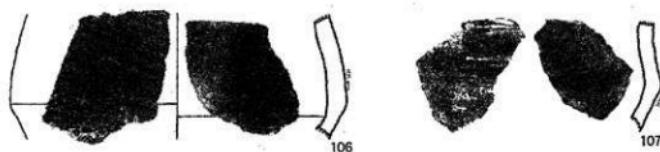
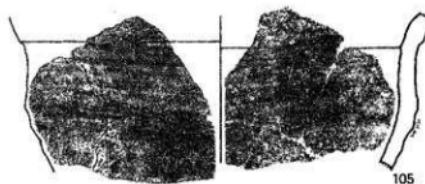
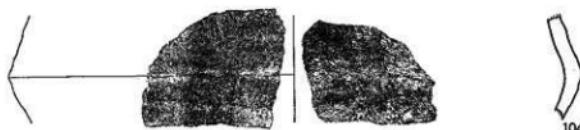
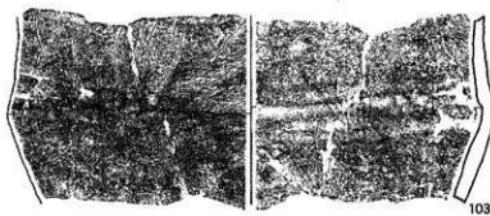
第16図 繩文晩期土器 (9)



第17図 繩文晩期土器 (10)

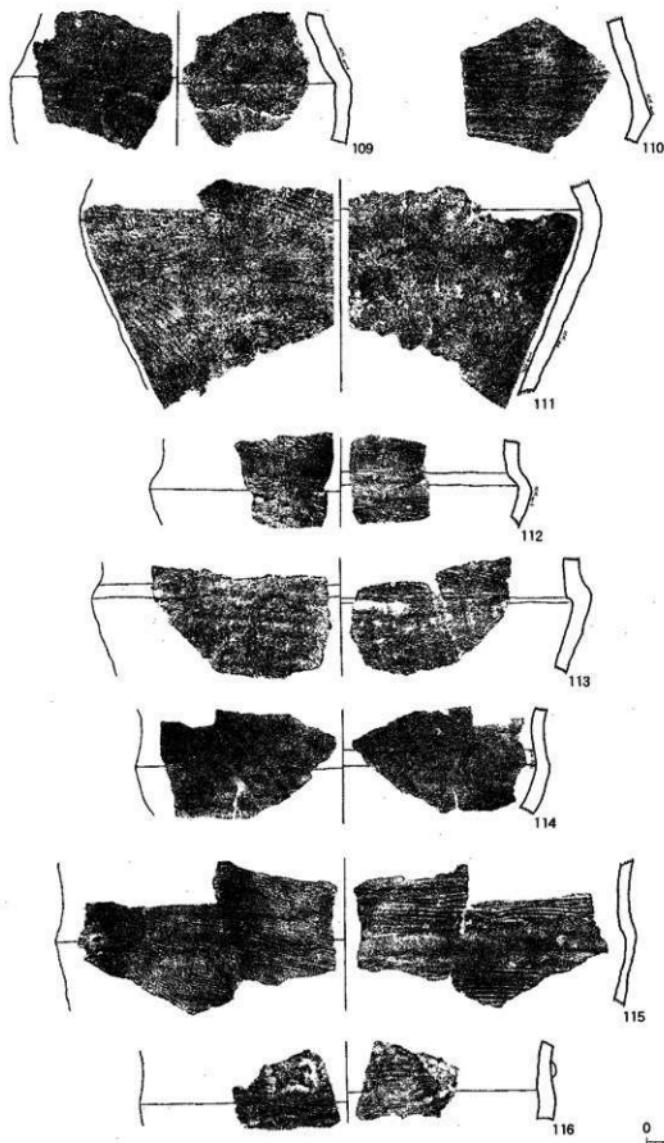


第18図 繩文晩期土器 (11)

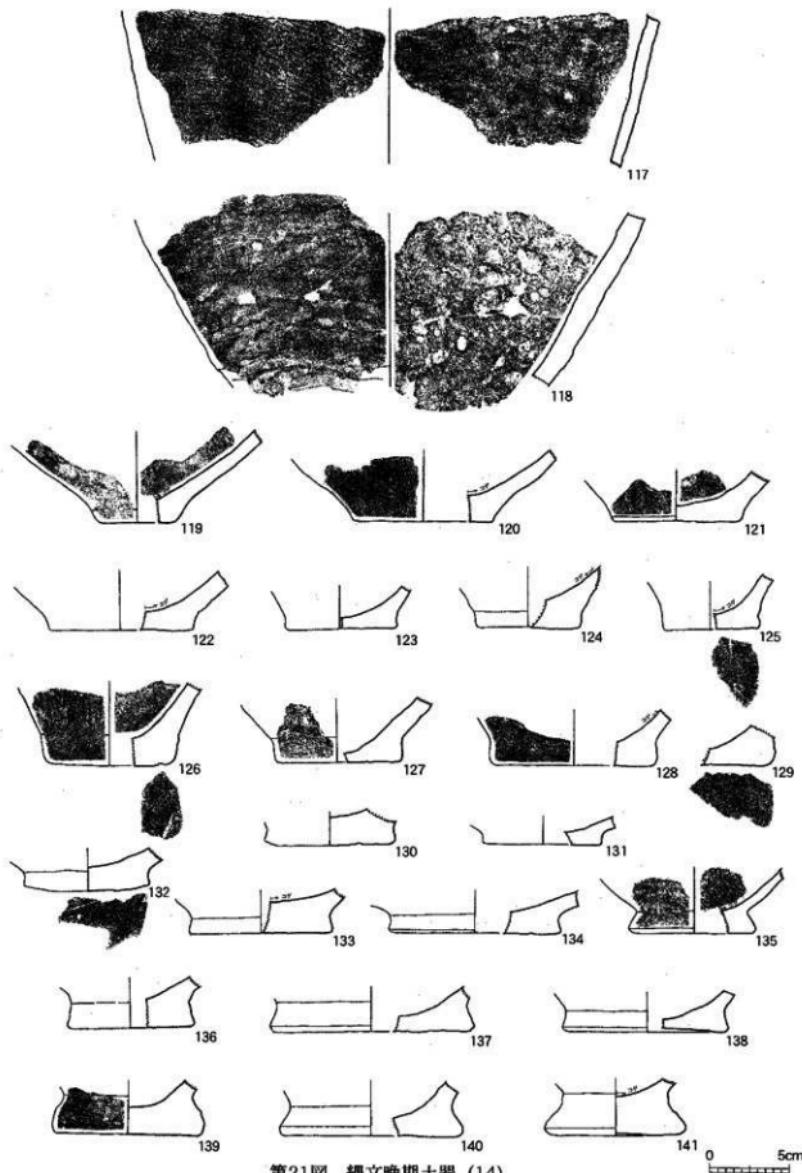


第19図 繩文晩期土器 (12)

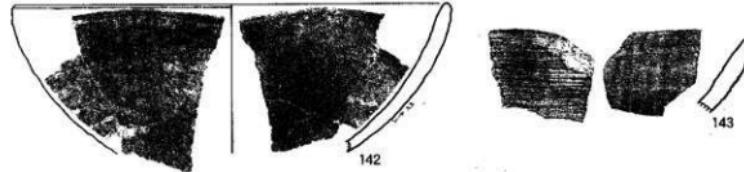
0 5cm



第20図 縄文晩期土器 (13)

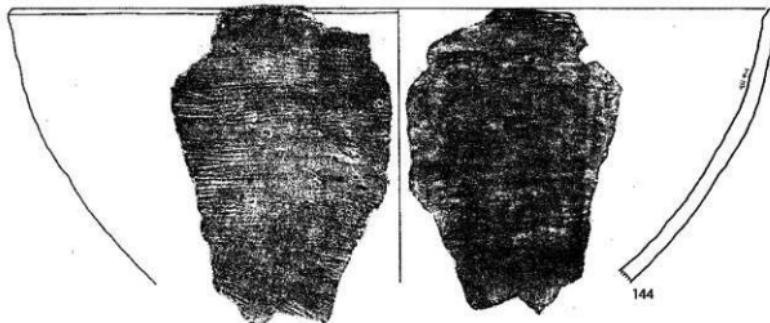


第21図 繩文晩期土器 (14)

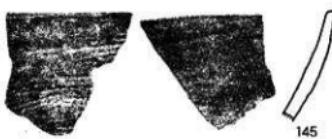


142

143



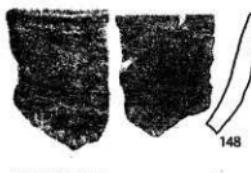
144



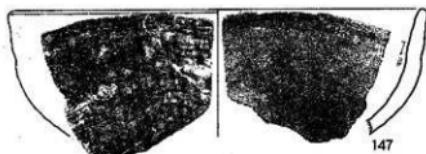
145



146



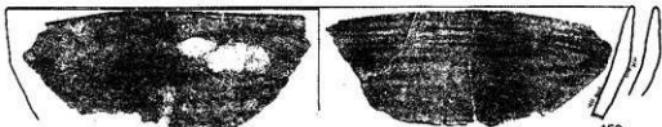
148



147



149

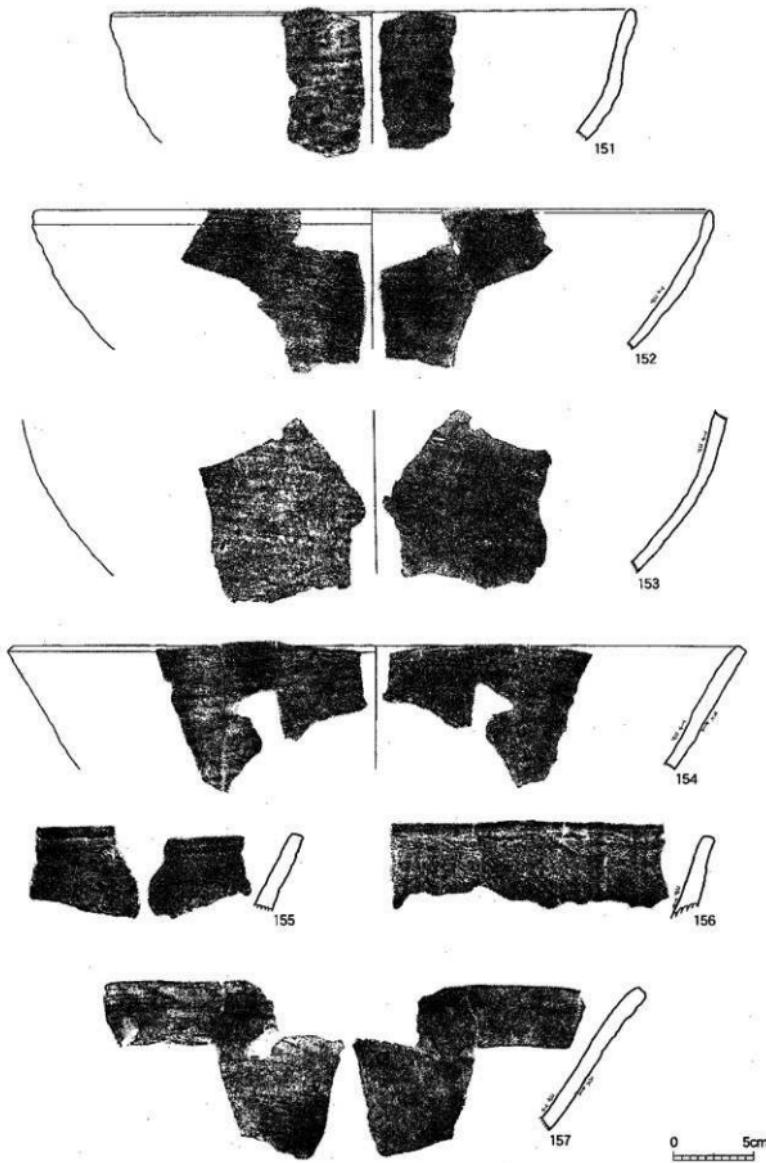


150

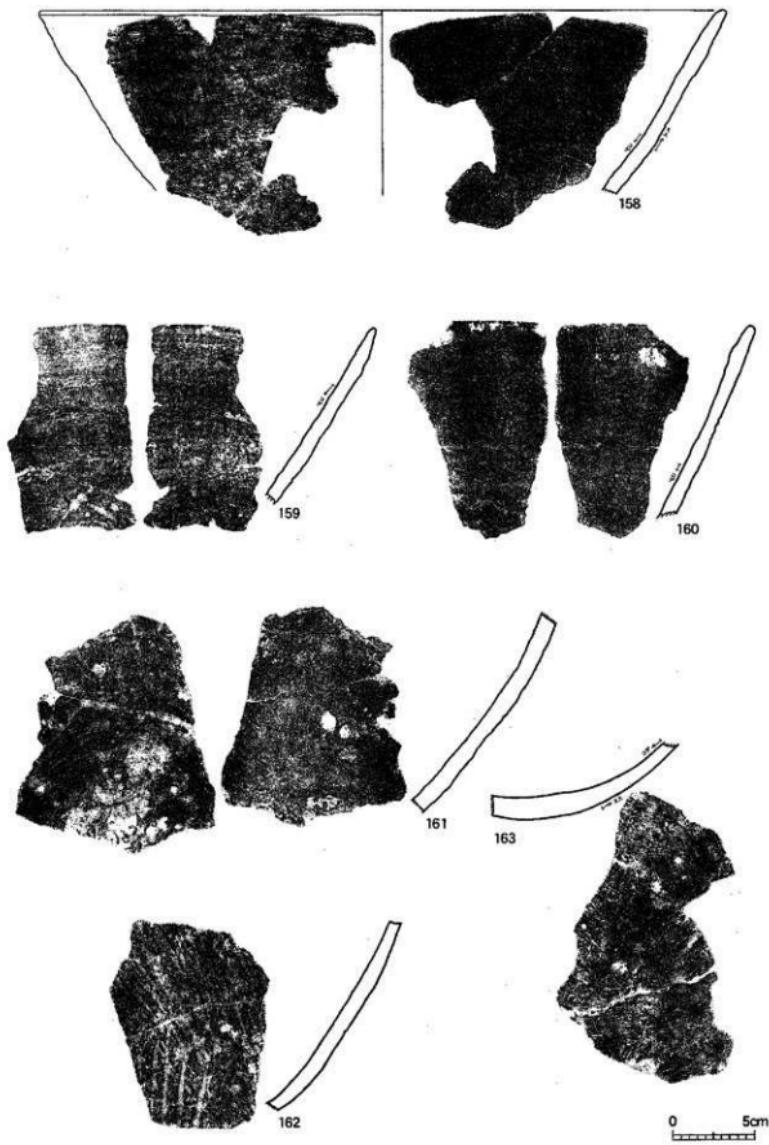
0

5cm

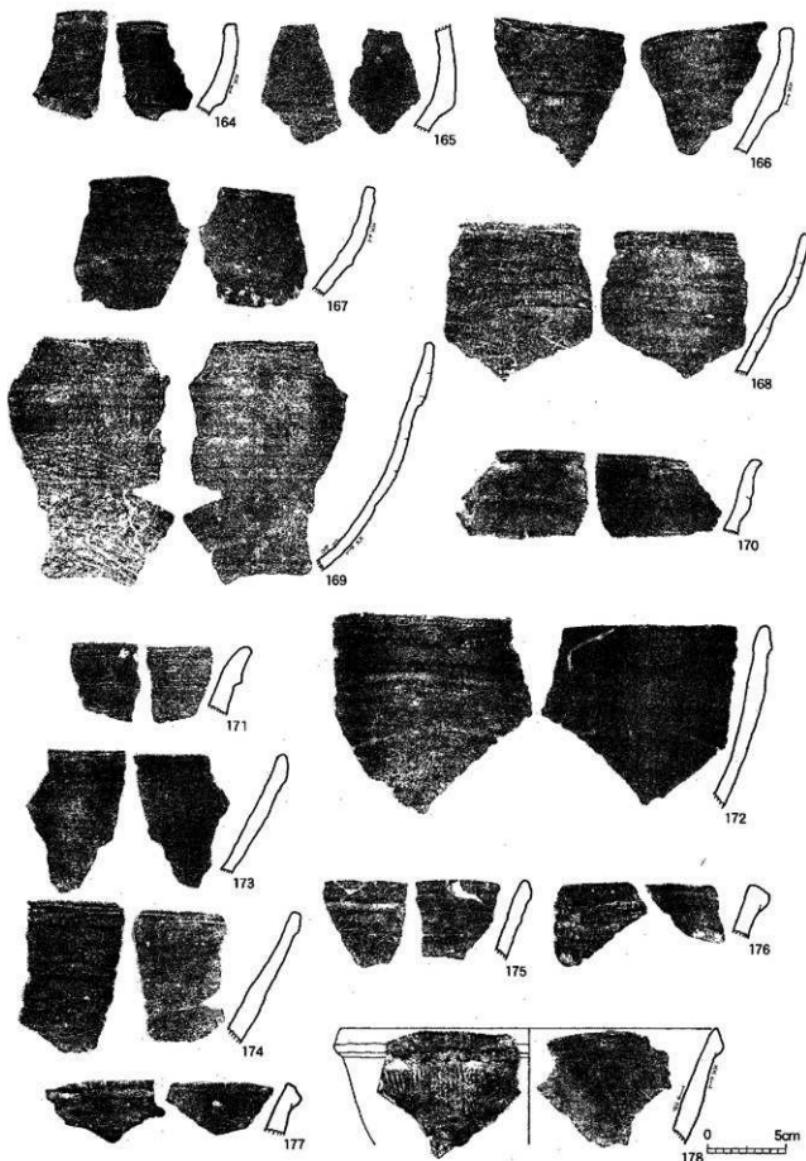
第22図 縄文晩期土器 (15)



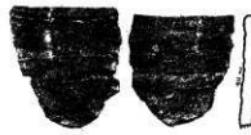
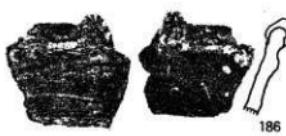
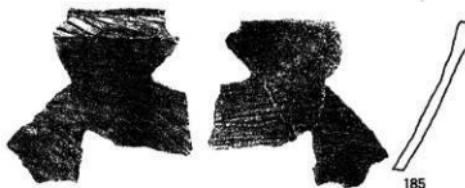
第23図 繩文晩期土器 (16)



第24図 繩文晩期土器 (17)



第25図 縄文晩期土器 (18)



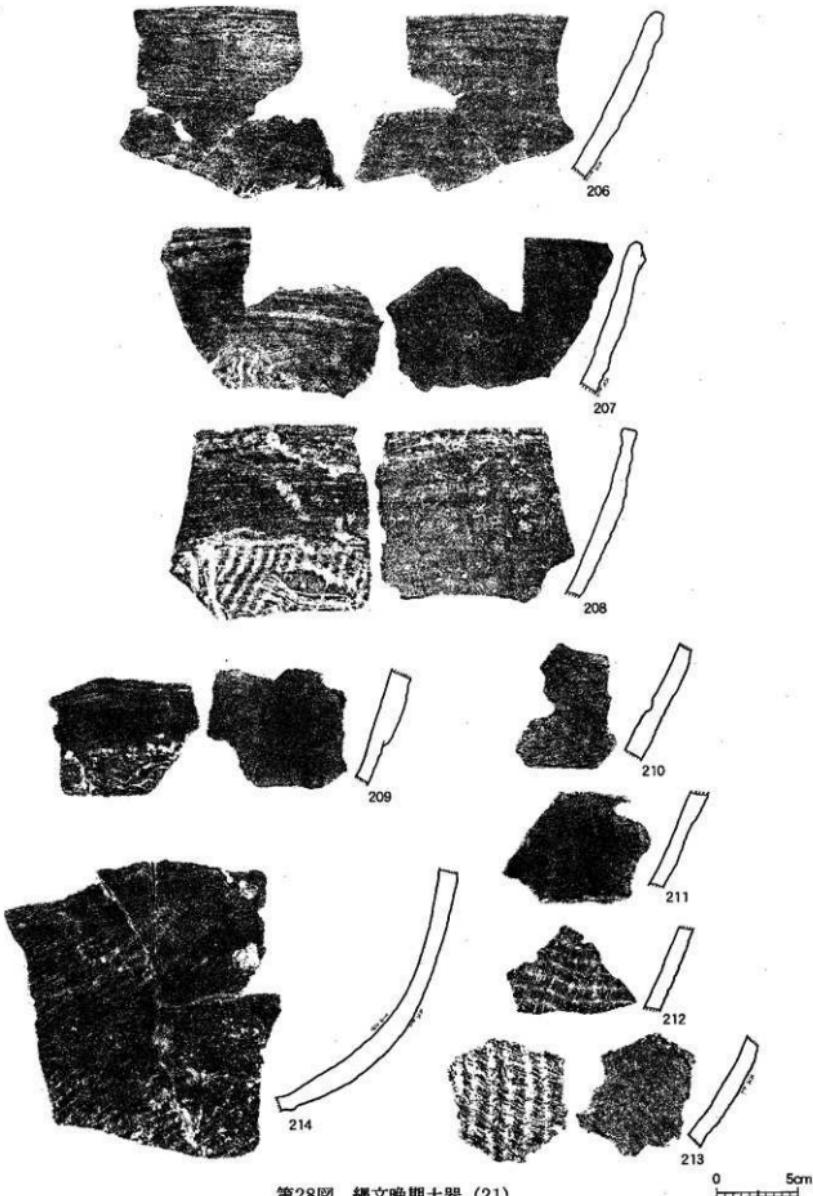
0 5cm

第26図 繩文晩期土器 (19)

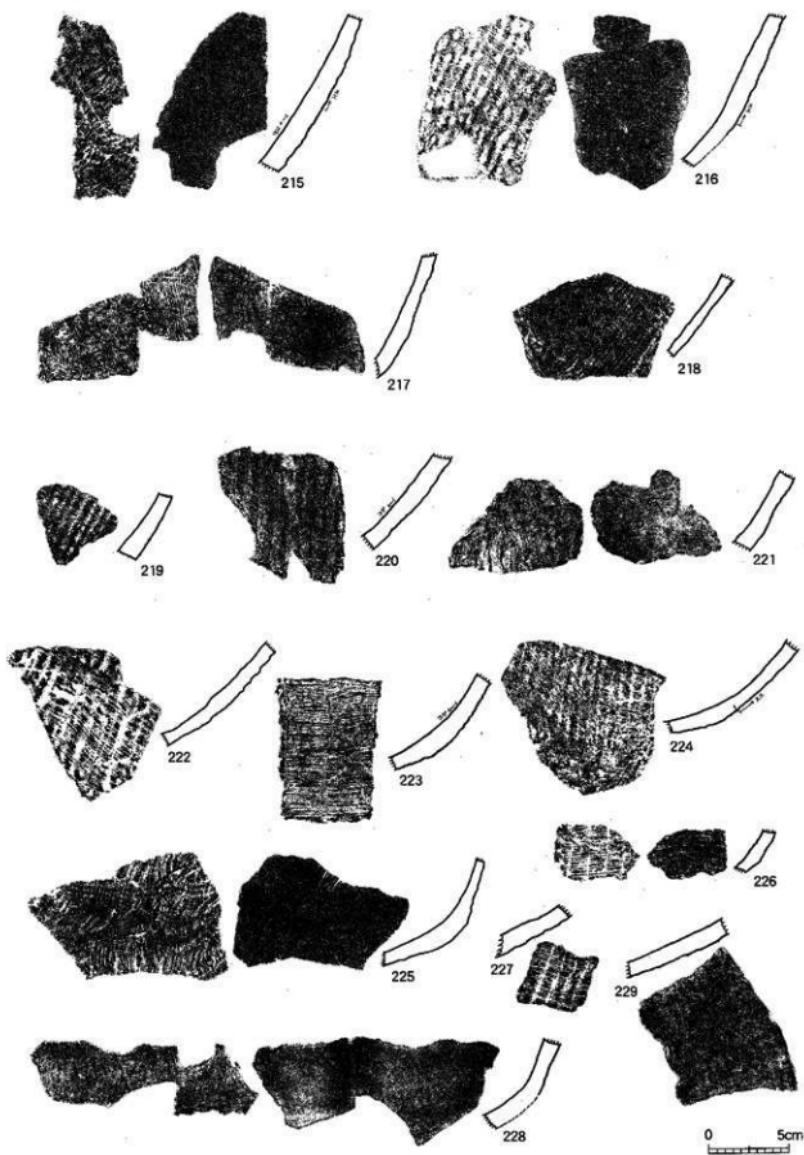


0 5cm

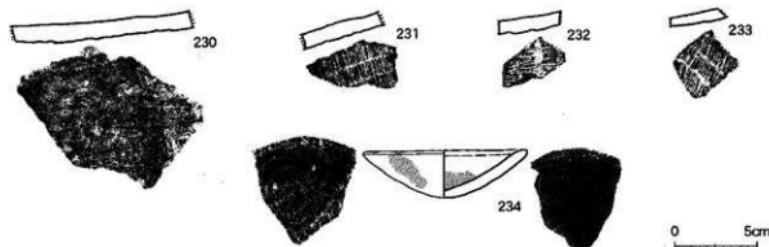
第27図 繩文晩期土器 (20)



第28図 繩文晩期土器 (21)



第29図 繩文晩期土器 (22)



第30図 縄文晩期土器 (23)

口縁部が胴部から内湾気味に立ち上がるるもの (142～153) 、直口気味となるもの (154～160) の両方が存在する。149は金色質母を含む。151は砂礫を多量に含む。

#### b類 (第25、26図 164～185)

幅広の口縁部を形成するもの (164～170) 、口縁端部が肥厚しないものは無刻目突堤となるもの (171～185) の両方が存在する。164、165は組織底土器の可能性がある。184は凹線を施すことによって、みせかけの肥厚帯を形成する。185は器壁が薄手である。

#### c類 (第26図 186～192)

a、b類に含めなかったものを一括した。187、189は外面がミガキ調整である。190～192 (191、192は同一個体か) は口縁端部が肥厚し、口唇部が幅広く形成されている。

#### d類 (第27～30図 193～234)

底部ないしは胴部に編布圧痕がみられるものである。口縁端部が外反するもの (196、197) 、口縁端部が肥厚するもの (204、205) 、無刻目突堤となるもの (206、207) が存在する。202、203には圧痕後の粘土貼付がみられる。234は小形で外面に赤色顔料が塗布されている。

#### e類 (第31、32図 235～290)

網目圧痕がみられるものである。拓本作業にあたり、圧痕を明瞭にするため綿棒を使用した。通常の拓本と比較すると実物より凹凸がなく、平面的になっていることをご容赦願いたい。大きめの圧痕がみられるもの (235～270) 、小さめの圧痕がみられるもの (271～290) の両方が存在する。大きめの圧痕には、238のように2本の網の結び目がみえるもの、242のように圧痕をナデ消したもの、246のように同じ圧痕がズレたものがみら

れる。小さめの圧痕にも、279のようにナデ消したもの、288のように別の網目と重ね合わせたものもみられる。

#### f類 (第33、34図 291～313)

木葉圧痕がみられるもので、口縁端部が無刻目突堤となる。概ね、2個体分の破片であろう。

大きめの葉を何枚も重ねて使用しているようである。

299のように葉の表部分がみえるもの、301のように葉縁部分がみえるもの、304のように葉に虫食いがみえるもの、305のように断面に葉の先端部がみえるものもある。

#### g類 (第34図 314、315)

314は籠形 (網代) 圧痕である。315は編布後の網目圧痕である。

#### h類 (第35図 316)

ボウル形ないしは中華錦形ではなく、バケツのような器形を呈する半粗半精土器である。編布圧痕であるが、別類として取扱った。

#### 第8類-3 (a類～g類、第36～41図317～415)

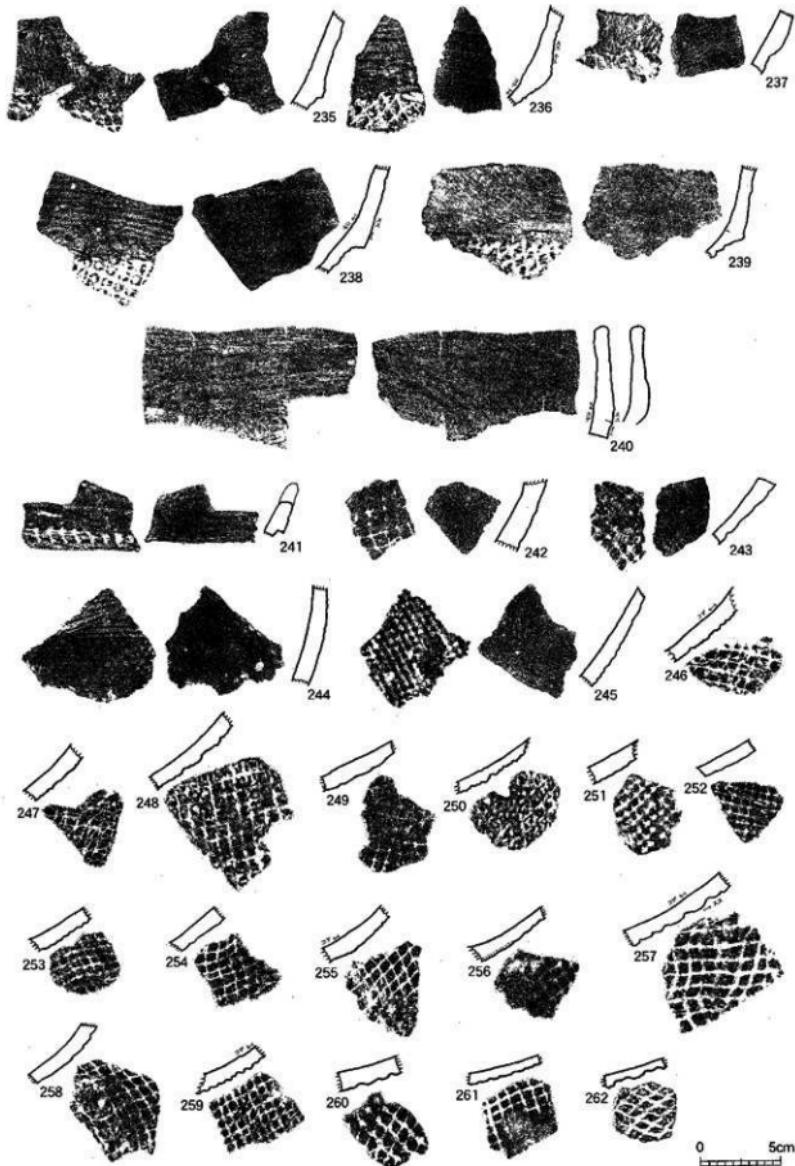
器面調整は内外面ともミガキ調整の精製土器である。

#### a類 (第36、37図 317～344)

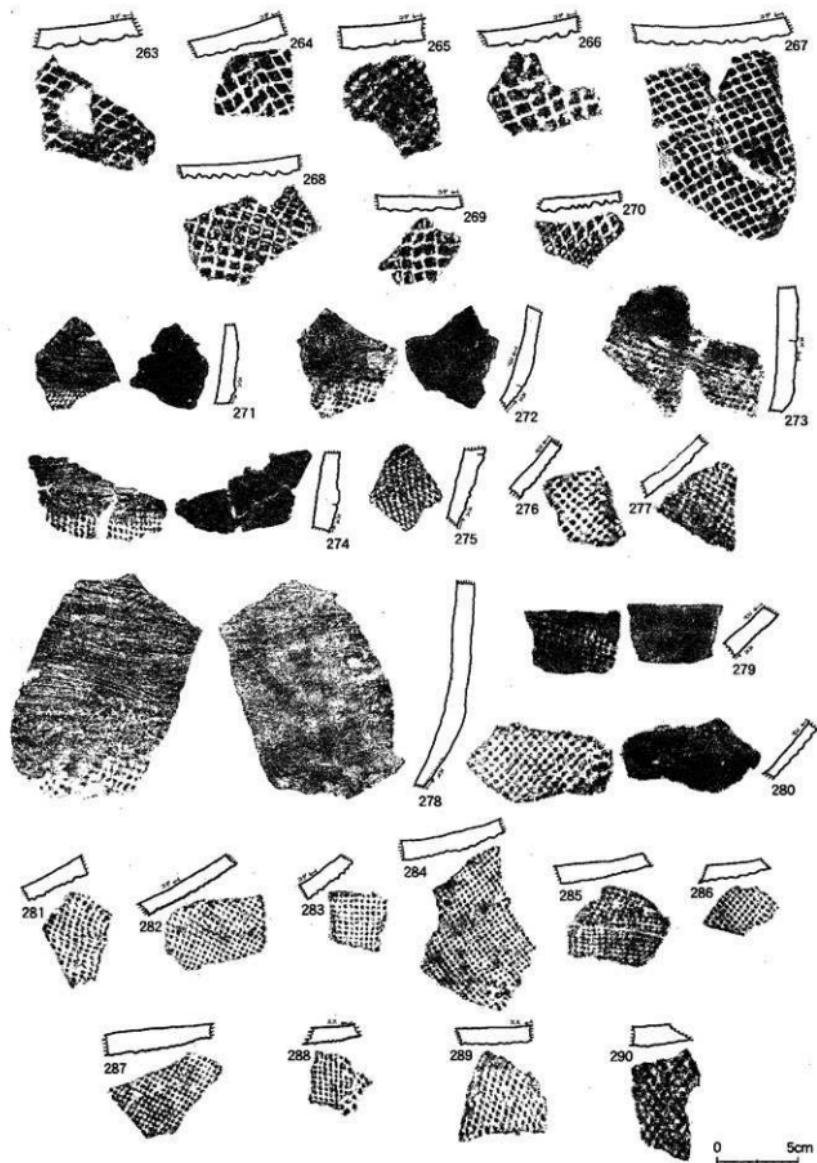
胴部屈曲部の外面に明瞭な稜線をもち、外反する口縁部をもつもので、口径が胴径を上回るものである。口縁端部が立ち上がるもの (317～325) 、立ち上がらないものの (326～329) 、口縁部が短く、口縁端部が立ち上がるものの (330、331) 、立ち上がらないものの (332、333) が存在する。344は乾燥時のヒビ割れを紐によって補修した可能性の高いものである。(詳細はⅢ章を参照。)

#### b類 (第37図 345～369)

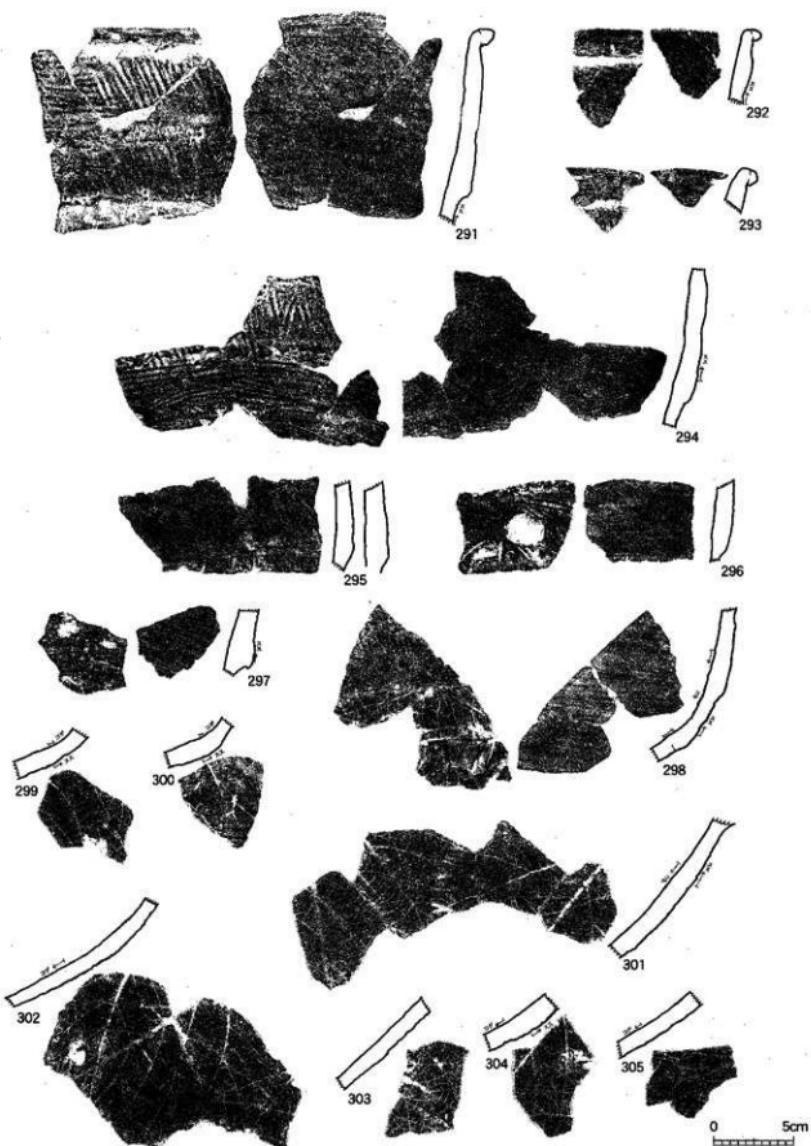
胴部屈曲部に明瞭な稜線をもたず、短く外反する口縁部をもつもので、胴径が口径を上回るものである。口縁



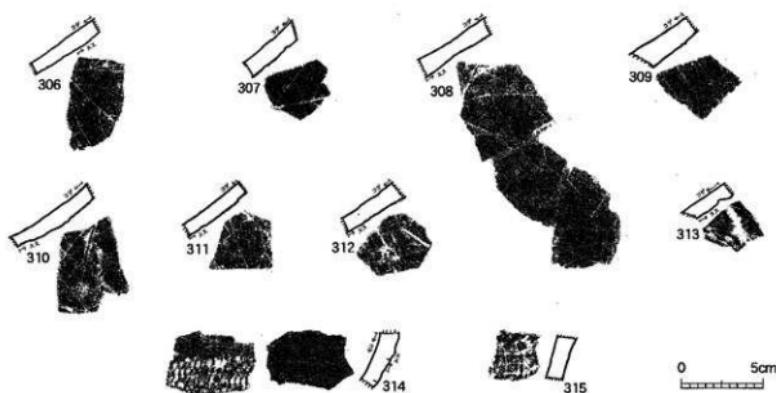
第31図 繩文晩期土器 (24)



第32図 縄文晩期土器 (25)



第33図 繩文晩期土器 (26)



第34図 縄文晩期土器 (27)

端部は内外面の沈線により、玉縁状を呈するものが主体を占めるが、内面ないしは外面のみの沈線(346、366～368)が施されるものも存在する。359、366は接合部分にスリット状の割みをもつものである。

#### c類 (第38図 370～381)

器形的にはb類と同様であるが、口縁部の短化傾向がみられるものである。口縁端部内面に沈線を施すものが主体を占めるが、不明瞭なものも存在する。

#### d類 (第38、39図 382～393)

肩部屈曲部の外面に稜線をもつものである。382、383は口縁端部内面に沈線が施されている。390～392は口縁端部が肥厚するものである。387、392、393は肩部屈曲部の断面が突帯状となる。

#### e類 (第39図 394～399)

外面に沈線が施されるもので、赤色顔料が塗布されるものが主体を占める。

#### f類 (第39、40図 400～413)

肩部から直口気味ないしは内湾気味に立ち上がるものである。402、403は同一個体である。404～408は口縁端部が肥厚するもので、407は肩部屈曲部の断面が突帯状となる。

#### g類 (第41図 414～417)

沈線ないしは突帯(粘土紐貼付)によって、文様構成をすると考えられるものである。いずれも傾き不安である。

#### ①円盤状土製加工品 (第41図 418～424)

土器片の再加工品である。実測作業は面取りの残存状況が良い部分に主眼をおき実施した。このため、土器片の上下関係については考慮していない。418、419は丁寧な面取りがなされている。423、424は周縁部を打ち欠いただけの雰囲気を残すものである。419は刻目突帯土器片を再加工している。いずれも縄文晩期の土器片と考えられる。

#### ②焼成粘土塊 (第41図 425)

大形の粘土塊である。左右両側に指頭らしき痕跡を残すが判然としない。胎土観察等により、縄文晩期のものと考えられるが、そうではない可能性も残る。

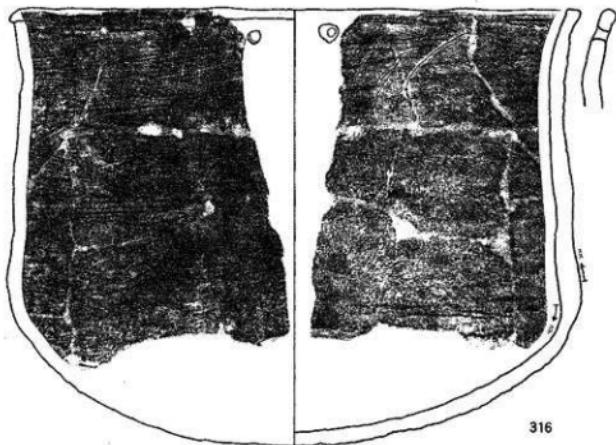
#### 第9類 (第41、42図 426～434)

口縁端部、口縁端部下、肩部屈曲部に刻目突帯が施されるものである。426～431の刻目は不規則で、弱い刺突(板の木口)によるものである。いずれも口縁端部が肥厚し、器壁は薄手である。426、427は同一個体である。428、429の肩下部に屈曲部が存在するため、鉢形を呈する可能性がある。430、431は同一個体である。432には口縁端部下に、断面三角形状の刻目突帯が施されるが、刻み目は板の木口による押し引きか。433、434は同一個体で、口縁端部と肩部屈曲部に刻目突帯が施される。刻み目は板の木口による押し引きか、押し潰された突帯の粘土が上下にはみだしている。

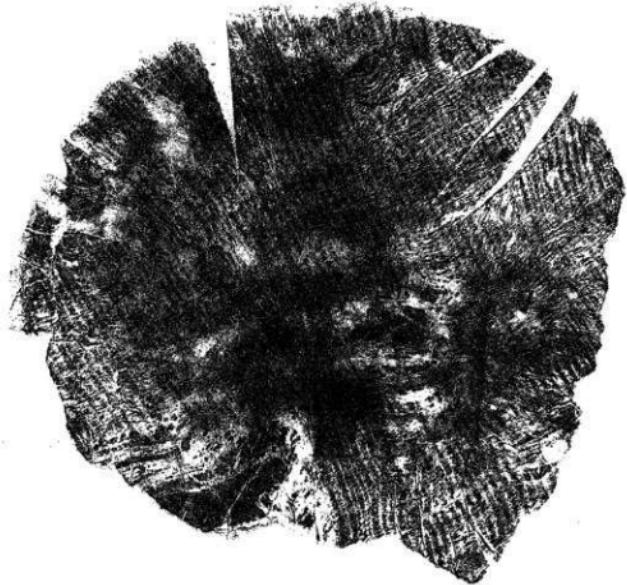
#### 4) 弥生土器

#### 第10類 (第42図 435)

壺形を呈する口縁部片で、口縁端部が外反する。弥生

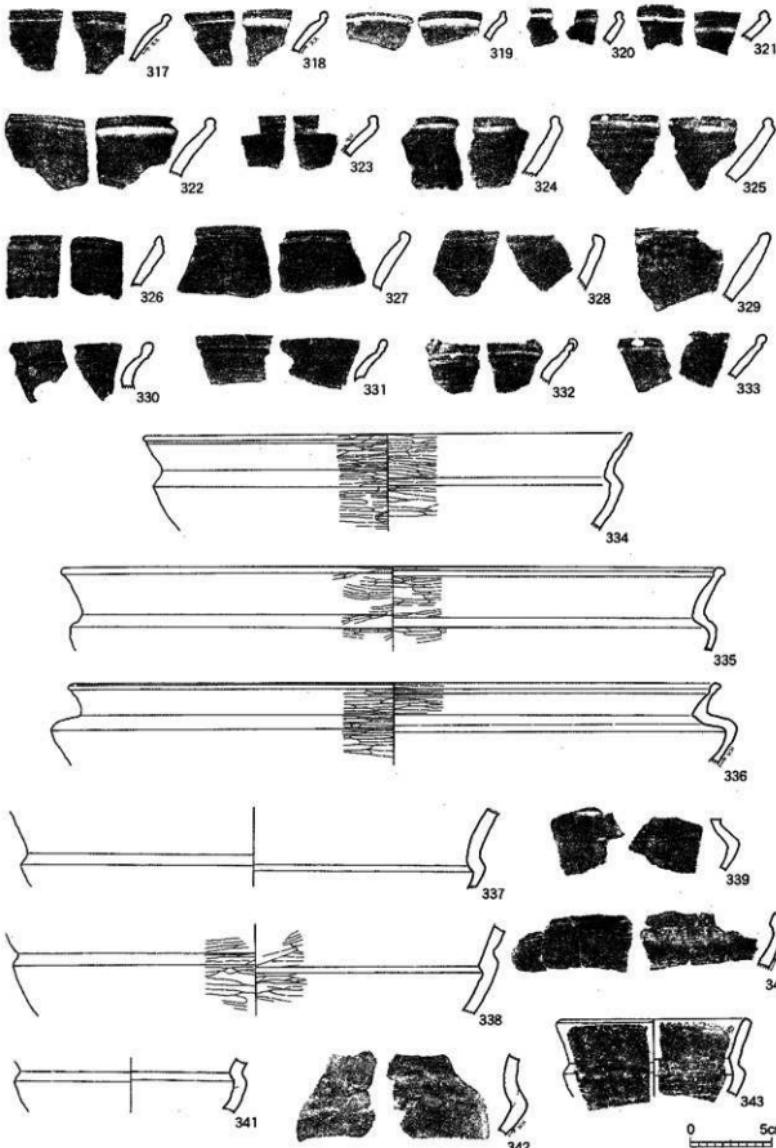


316

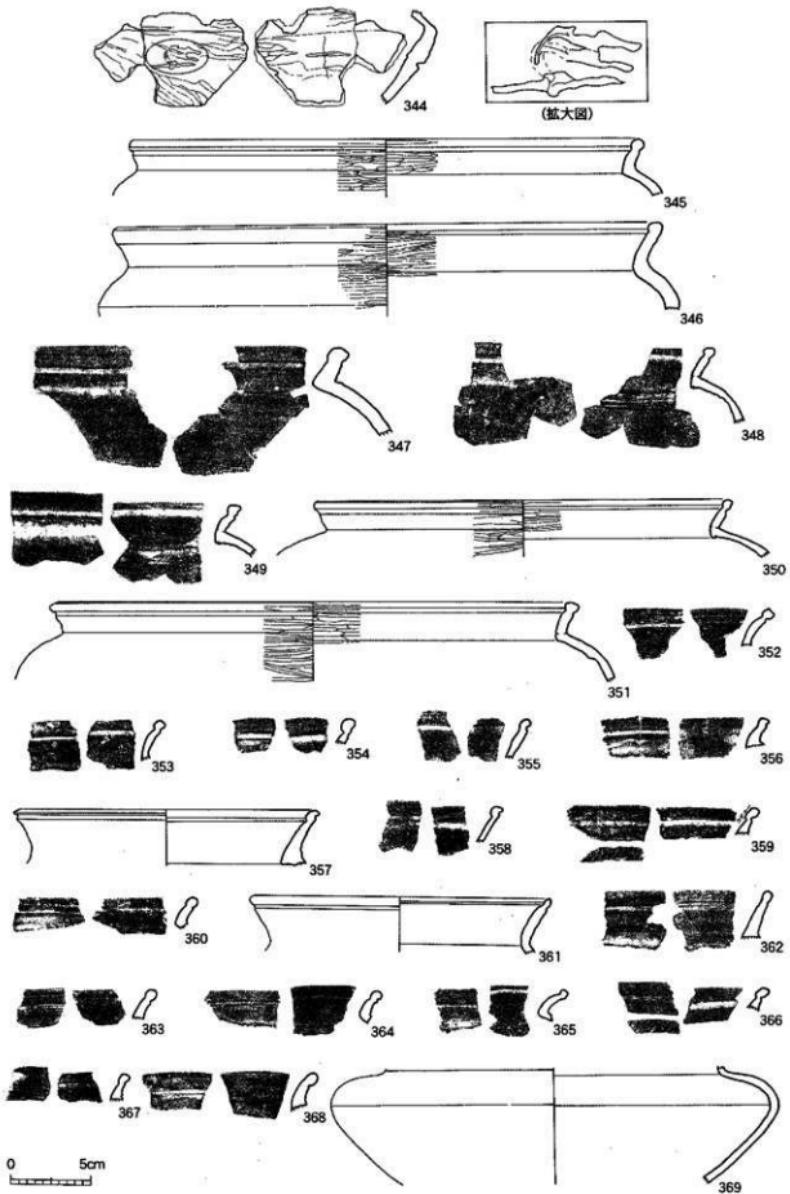


0 10cm

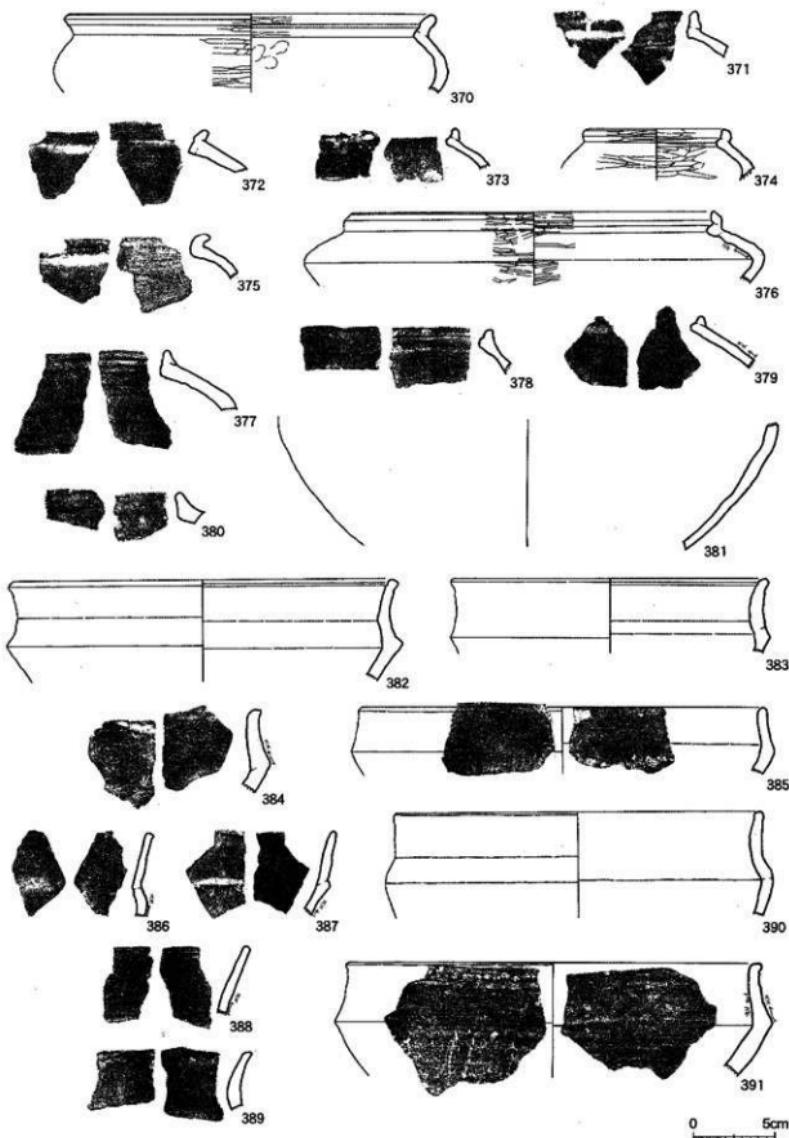
第35図 縄文晩期土器 (28)



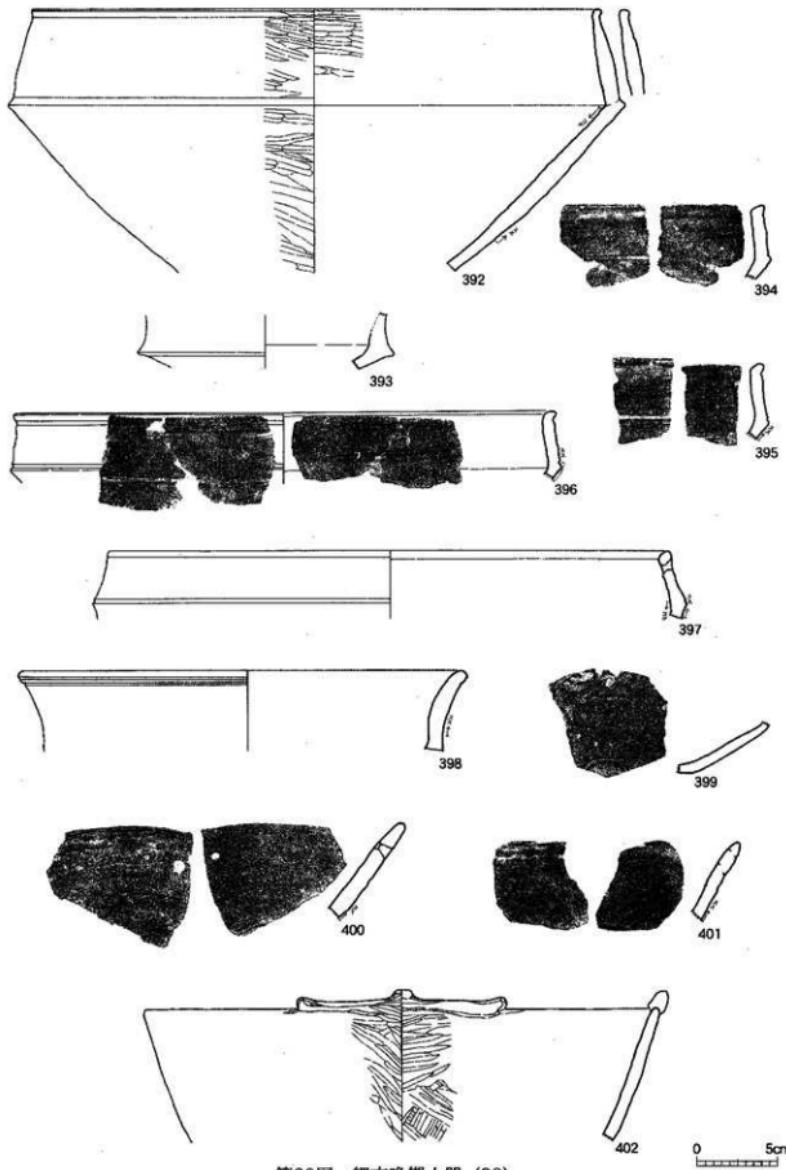
第36図 繩文晩期土器 (29)



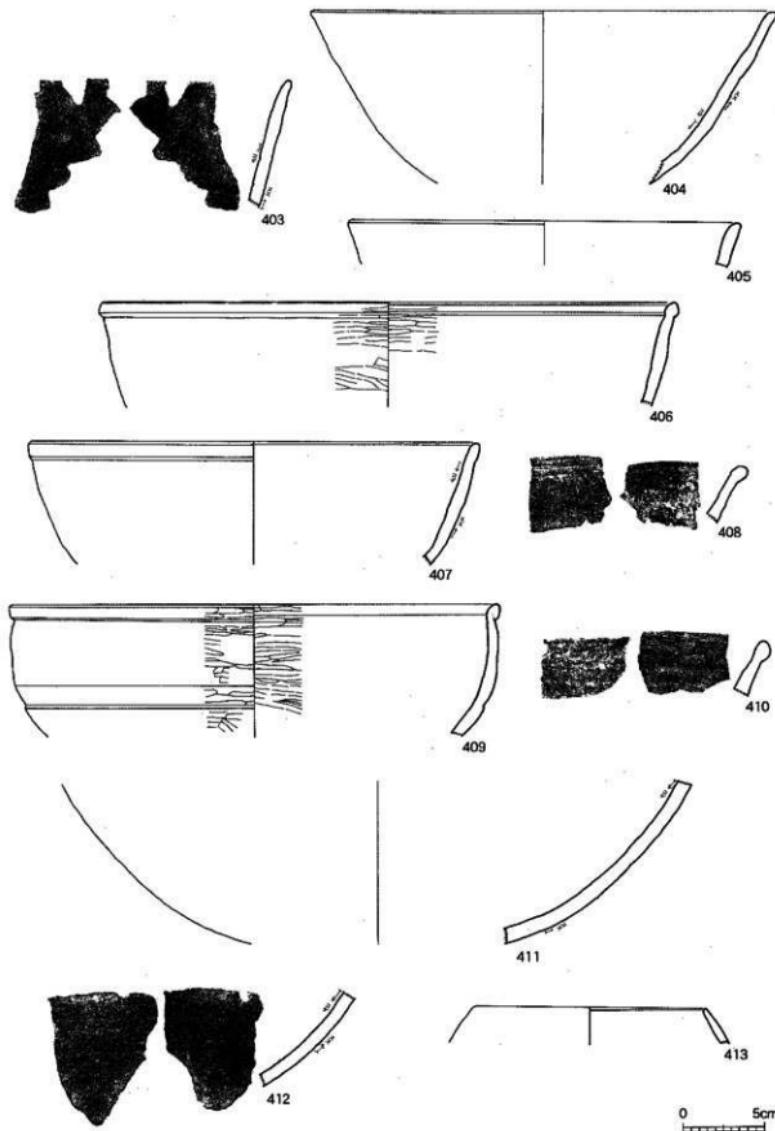
第37図 繩文晩期土器 (30)



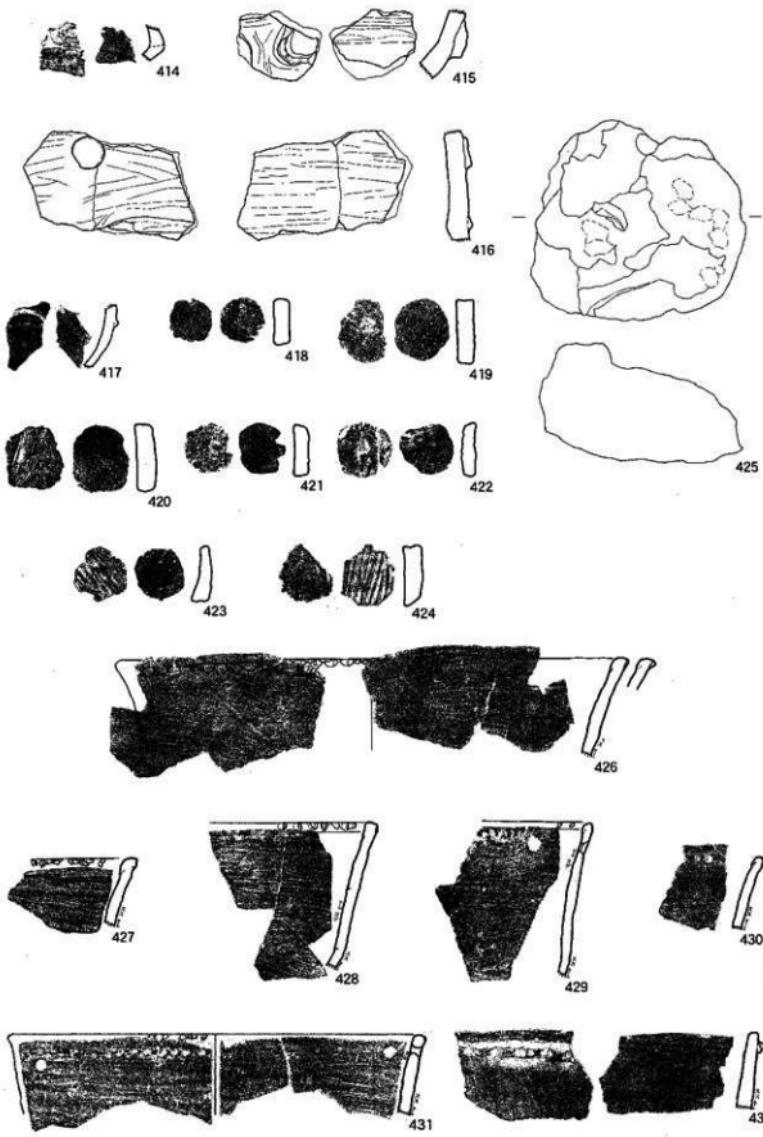
第38図 繩文晩期土器 (31)



第39図 縄文晩期土器 (32)

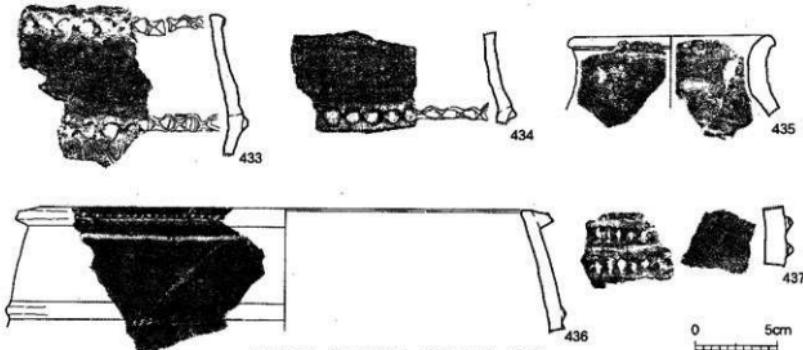


第40図 繩文晩期土器 (33)



第41図 繩文晩期土器 (34)

0 5cm



第42図 繩文晩期～弥生土器 (35)

時代としたが、縄文晩期の可能性も否定できない。

#### 第11類 (第42図 436, 437)

脚部から内傾しながら立ち上がるるもので、口縁端部が逆L字形を呈する。刺目突帯が脚部では数条施される。436は胎土に砂礫が多く含まれる。

#### 5) 縄文晩期石器 (第43～48図 438～485)

狩猟具（石鏃等）、土壙具（打製石斧等）、加工具（磨製石斧・石錐等）、製粉具（磨石、敲石等）などの多種多様な石器が出土しており、土壙具、製粉具が多いことにその特徴がある。しかし、磨石・敲石とのセット関係を考えられる、石皿・台石等が少ないのもその特色である。石材も多種多様で西北九州産も存在する。

#### 石鏃（第43図 438～442）

二等辺三角形タイプ（438～440）と五角形タイプ（441、442）の両方が存在する。石材は安山岩（438、440、442）、チャート（439、441）、ギョクズイ、鉄石英、粘板岩、黒曜石である。

#### 石匙（第43図 443）

比較的粗雑な調整である。つまみ部の抉りは18mmを測る。石材はチャート（443）である。

#### スクレイパー（第43図 444）

先端部は、片側から細かい剥離が加えられる。石材は粘板岩（444）、珪質頁岩、安山岩である。

#### 石錐（第43図 445）

先端部は細かく加工している。石材はチャート（445）である。

#### 2次加工剥片（第43図 446）

剥片の周辺側が細かく加工されている。石材は黒曜石（446/腰唇）、（黒曜石/三船）、チャートである。

#### 横刃形石器（第44図 447、448）

447は磨製石斧を再加工したもので、刃部は両面から加工されている。448は剥片の周辺を調整しており、刃部は両面から加工されている。石材は頁岩（447、448）、粘板岩である。

#### 異形石器（第44図 449）

両面を加工して三日月状となる、石鎚様のものだが、周辺は純い。つまみ部の抉りは9mmを測る。石材は黒曜石（449/三船）である。

#### 磨製石斧（第45図 450～456）

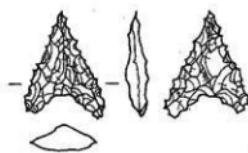
450は基部に装着痕がみられる。454は両面・側縁とも丁寧に磨いている。455、456はノミ形で、456の刃部と基部には削痕が消耗している部分がみられる。石材は頁岩（450～456）、蛇紋岩、砂岩である。

#### 打製石斧（第45、46図 457～466）

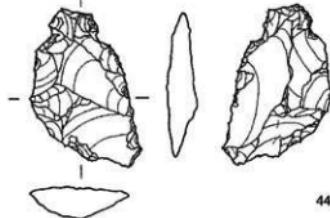
短冊形（457、458）、ラケット形（459～465）、長靴形（466）が存在する。ラケット形の抉れ部は、概ね、3～5cmである。463、464には削痕もみられる。465は再加工を繰り返したものである。石材は頁岩（457～466）、粘板岩、砂岩である。

#### 石錐（第47図 467～473）

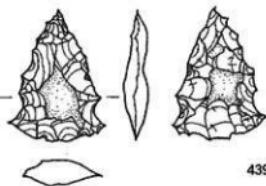
打欠石錐（467～471）と切目石錐（472、473）の両方が存在する。刃溝（467、468、470、471）や着紐のための切目が表裏でズレているもの（472）もみられる。石材は砂岩（467～473）、頁岩である。



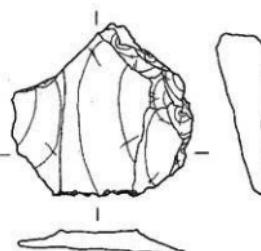
438



443

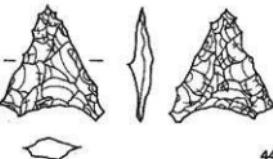


439

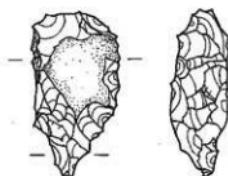


444

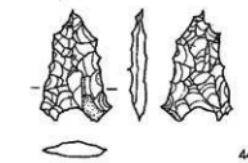
A scale bar ranging from 0 to 5 cm.



440



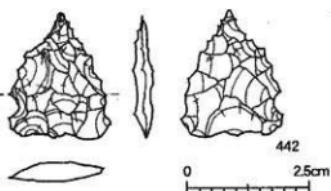
A scale bar ranging from 0 to 5 cm.



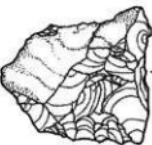
441



445



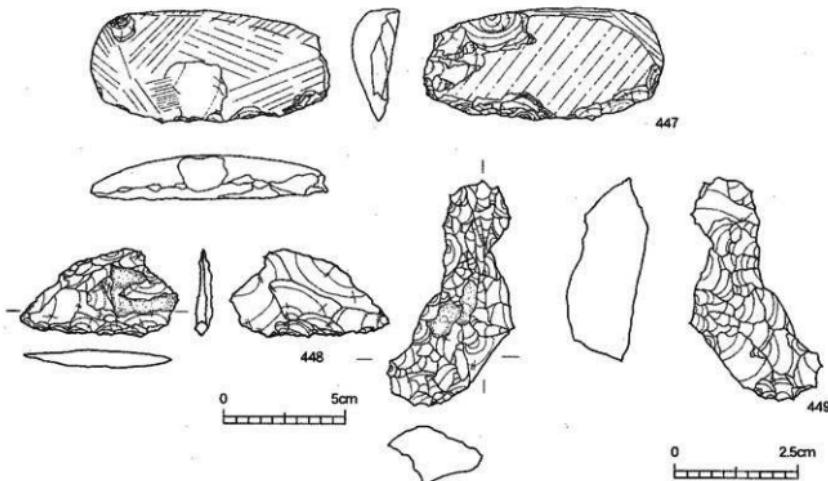
442



446

A scale bar ranging from 0 to 2.5 cm.

第43図 繩文晩期石器 (36)



第44図 繩文晩期石器 (37)

**敲石 (第47図 474)**

片面と側面を敲石として使用している。石材は砂岩 (474) である。

**磨石 (第47図 475)**

椎円縦の両面を、磨石として使用している。石材は砂岩 (475) である。

**磨石・敲石 (第47図 476、477)**

両面、側面を磨石・敲石として使用している。石材はいずれも砂岩である。

**ハンマーストーン (第47図 478)**

主に側面に敲打痕が残り、結果的に菱形状となっている。石材は砂岩 (478) である。

**凹石 (第47図 479)**

片面のみを使用している。石材は砂岩 (479) である。

**砥石 (第47、48図 480、481)**

480は両面に擦痕がみられる、片面は明確な筋砥石である。481は四面に擦痕がみられるものである。石材は砂岩 (480)、頁岩 (481) である。

**円盤状石製加工品 (第48図 482)**

本来、椎円形であったと考えられるものである。周辺は面取りされている。復元径12cmを測る。石材は凝灰岩

岩 (482) である。

**石皿 (第48図 483)**

大形の石皿である。片面と側面に擦痕が認められる。

石材は安山岩 (483)、凝灰岩、砂岩である。

**擦切石器 (第48図 484)**

両面、側縁に擦痕がみられるものである。両面は一定幅の擦痕がみえ、側縁の一部には、使用後に面をもつまでも擦れていない部分も存在する。厚さは最大厚7mmと薄く、石材は砂岩 (484) である。

**6) 弛生石器 (第48図 485)**

**磨製石錐 (第48図 485)**

整形による明瞭な削痕がみられ、薄身で、石材は珪質頁岩 (485) である。弛生時代のものか。

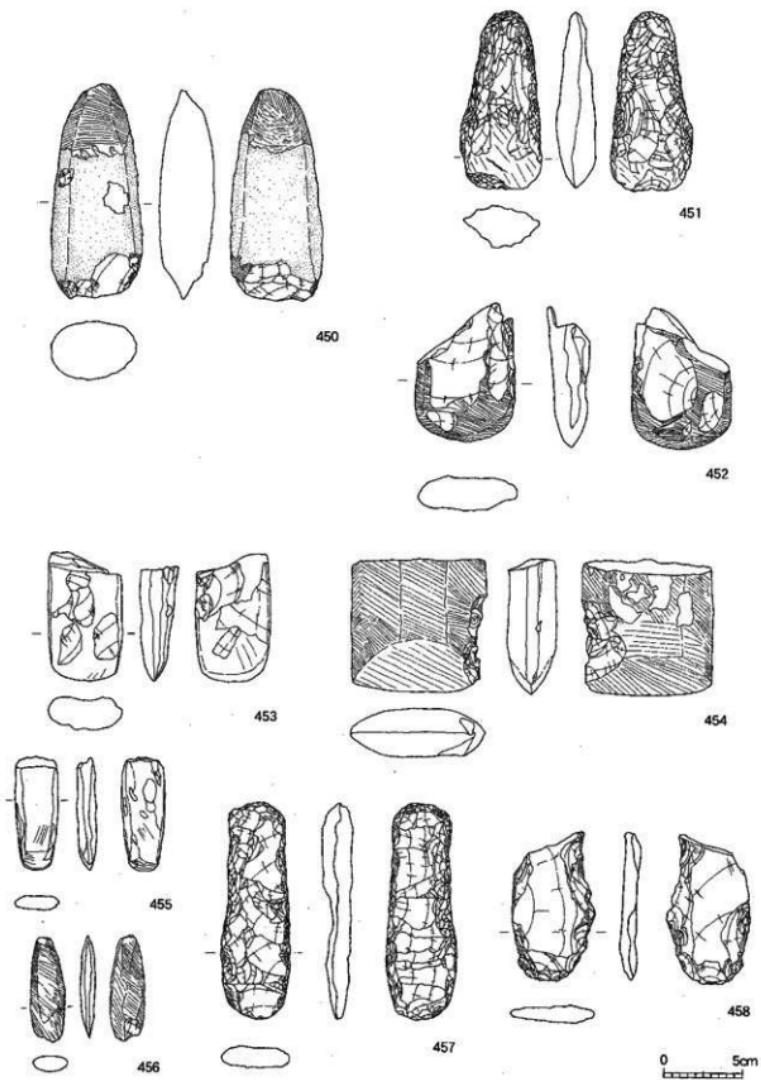
**7) 古代以降の遺物 (第49、50図 486~518)**

II層を主体として出土しているが、一部、III層からも出土している。2~4区、21、22区から出土している。高台があるものを壊し、ないものを納として扱った。

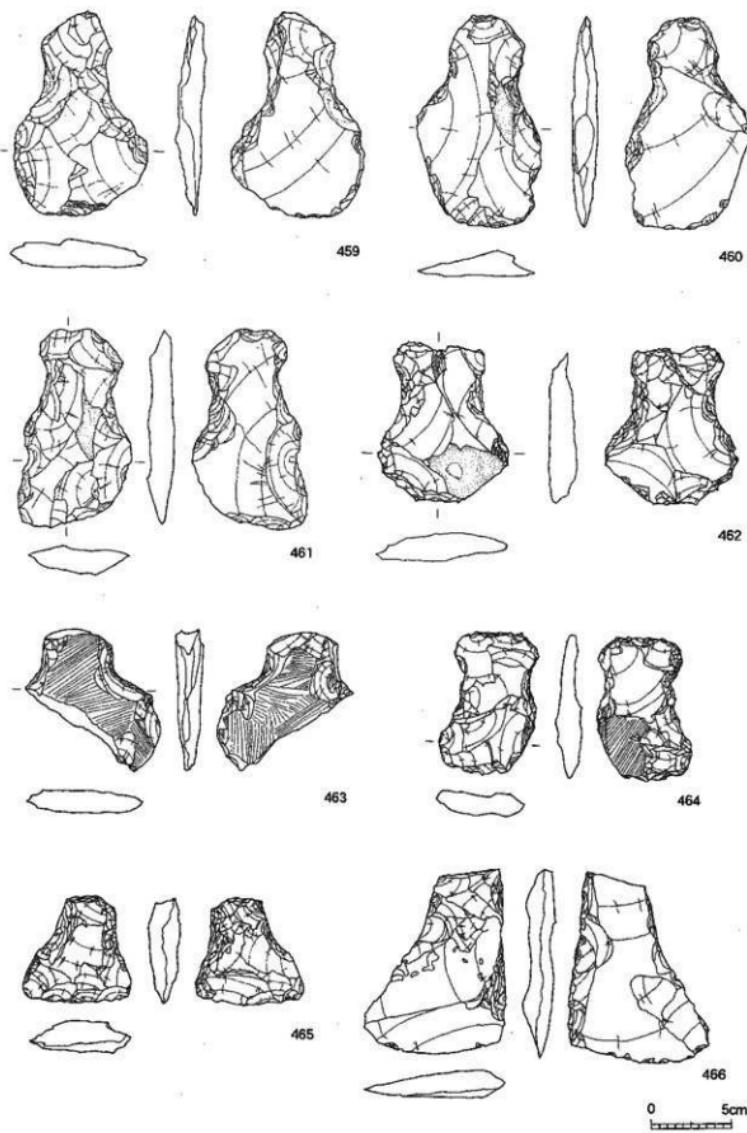
土師・須恵壺、瓶、墨書き器、須恵器、土師器、焼成粘土塊、土鍋が出土している。

**土師器壺 (第49図 486~488)**

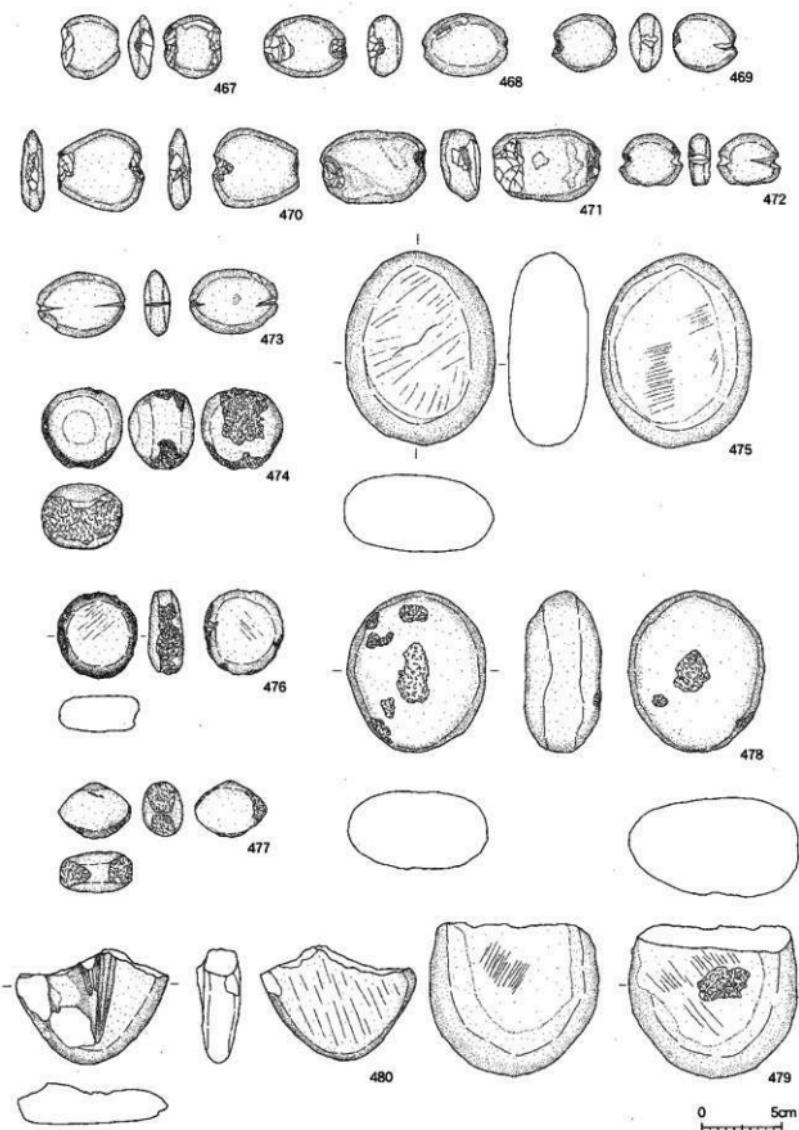
486、487には不規則な静止ナデがみられ、体外下面下



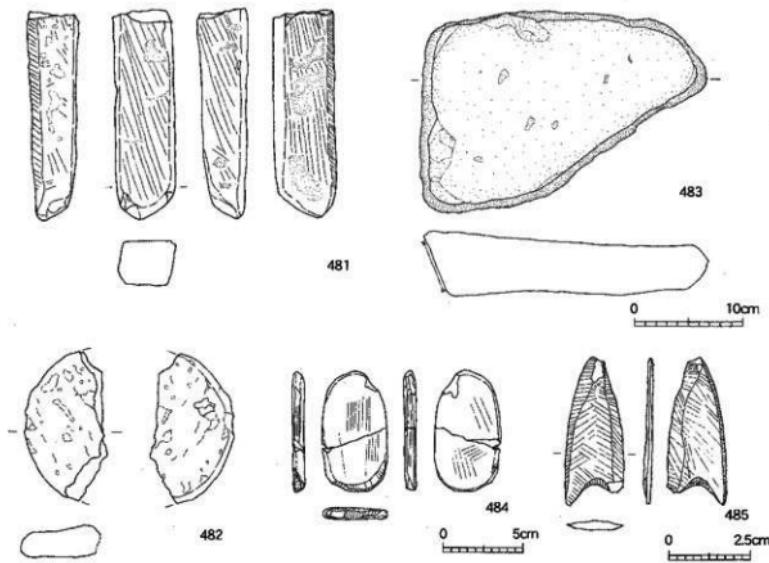
第45図 縄文晩期石器 (38)



第46図 繩文晩期石器 (39)



第47図 繩文晩期石器 (40)



第48図 繩文晩期～弥生石器(41)

端はナデ調整である。488の体部外面下端はケズリ調整で、内外面に何らかの付着物もみえる。底部の切り離し方法は、いずれも回転ヘラ切りによるもので、後にナデられている。

#### 土師器楕 (第49図 489～493)

489、490は底面外周部に、工具による連続刺突がみられることから、高台が剝離したものと判断し、楕として取扱った。いずれも体部外面下端はナデ調整である。

491～493は高台のみを残すものであるが、491には編布圧痕がみられる。491、493の高台内はいずれもミガキ調整である。

#### 墨書き器 (第49図 494)

内面・体部外面下端はミガキ状の丁寧なナデ調整で、胎土は精緻である。外面に墨書きはあるが文字ではない可能性が高い。底部の切り離し方法は、回転ヘラ切りによるもので、後にナデられている。

#### 須恵器 (第49図 495～497)

495、496は壊なのか、焼なのかは不明である。器壁

は薄手で、胎土に黒色粒を含む。497は塗形の可能性が高いものである。不規則な静止ナデがみられ、外面脇部下端はケズリ調整である。最大長6mmの砂礫を含み、内面には粘土接合痕がそのまま残り、粗雑な空気感である。

#### 土師器楕 (a類～c類、第49、50図 498～515)

分類に当たっては、器面調整等に主眼をおいた。

##### a類 (第49図 498～507)

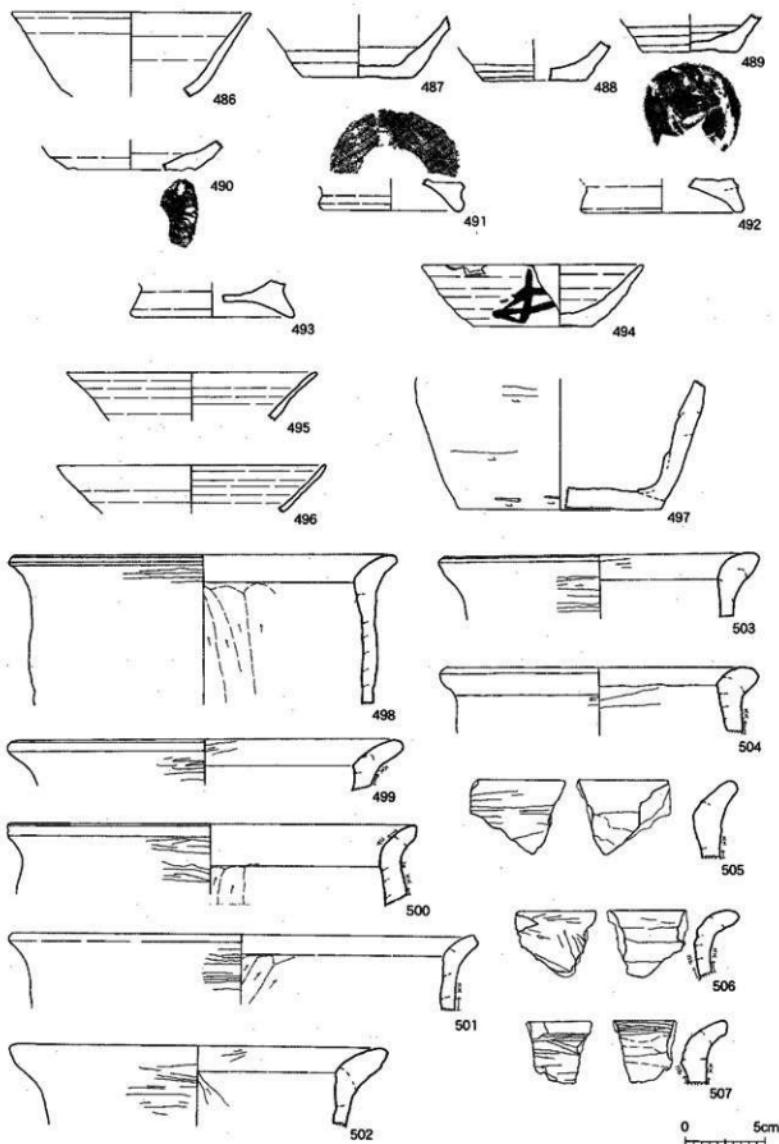
内面の脇部下部を斜・縦位のヘラケズリで仕上げるものである。外面は横位のハケ調整である。橙色を呈するものが多い。

##### b類 (第50図 508～512)

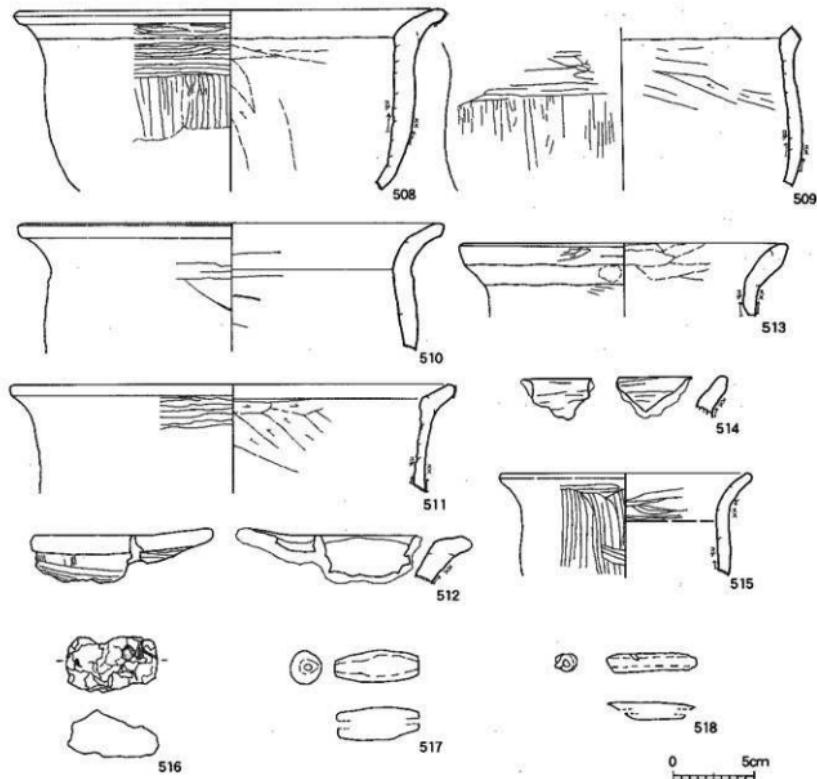
内面の脇部下部の上位を、横位のヘラケズリで仕上げるものである。概ね、外面は縦位のハケ調整後、横位のハケ調整 (脇部下) である。a類と比較すると丁寧な器面調整で、茶褐色を呈するものが多い。506～508は同一個体である。

##### c類 (第50図 513～515)

a, b類に含めなかったものを一括した。513は口縁部



第49図 古代土師器・須恵器・土師甕



第50図 古代土師壺・土製品

内面にヘラケズリが残る。515は口部に類似するが、外  
面の縦位のハケ調整が口縁部まで達する。

#### 焼成粘土塊 (第50図 516)

22区のII層から出土しているため、古代の遺物とし  
て扱ったが、萬文晩期の可能性も否定できない。

#### 土鍬 (第50図 517, 518)

517は両端が面取りされている。孔形は左右（正円、  
横円）で違う。518は孔径1mmと小さく、孔形はほぼ  
正円である。

### 第III章 まとめにかえて

#### 1 出土土器について

出土土器は、1類—条ノ丸式土器、2類—平行式土器、3類—中期の型式不明土器、4類—指宿式土器、5類—市来式土器、6類—中岳II式土器、7類—入佐式土器、8類—黒川式土器（孔列文・組織痕土器）、9類—刻目突唇文土器、10類—型式不明の壺形土器、11類—入来式土器、古代の土師器、須恵器、土師器甕である。

#### 2 黒川式土器について

本遺跡で最も多量に出土している、土器型式は黒川式土器である。その中でも、中～新様式を主体としており、いわゆる無刻目突唇を施す深鉢形土器も出土している。

また、沈線を施す精製浅鉢（千河原遺跡・櫻木原遺跡類似）資料も存在する。さらに、沈線ないしは突唇（粘土紐の貼付）で文様構成をする、深鉢・浅鉢形土器も出土している。

#### 3 組織痕土器について

本遺跡からは、黒川式土器に伴う組織痕土器が、一定量出土している。その種類としては、縦目・網目・木葉・籠目（網代）压痕の4種類である。また、網目と縦目との圧痕が両方みえるものも存在する。

縦目压痕はタテ糸が1.3～1.7mm、ヨコ糸が9～12mmのものが主体を占める。また、ヨコ糸が連続して縦目される装飾性があるとされるものも、少量ではあるが存在する。縦目はその大半がほつれかかったものを使用しているようである。

網目压痕は3～8mmのものが主体を占める。2本の網の結び目がみえるもの、網目压痕の間に縦目压痕のみえるものも存在することは、型離れ材としての役割を考える上で、大変興味深い。また、網の補修がみえるものやサイズの異なる網を重ねたものも存在する。

木葉压痕は縦目・網目压痕と比較すると少量である。型離れ材として大きめの木の葉を使用することは定着しなかったのだろうか。

木葉の樹種については、寺田仁志氏に指導をお願いした。その結果素継（先端部）等が不明であるため、使用された木葉の特定はできなかった。しかし、落葉つる性多年草のクズの木葉に類似していることを示唆された。

#### 4 土器製作について

本遺跡の出土遺物の中で、時潮を問わず土器製作に関する資料が出土しているため、改めて紹介したい。縦文晚期、精製浅鉢の口縁部下接合面にスリット状の刻みを有するものが出土している。また、古代の土師器（碗）の高台との接合面に縦目压痕が残るもの、工具による連続刺突のみられるものの両方が存在する。いずれも、別の部位との接合を容易にするための技法と考えられる。

さらに、縦文晚期、精製浅鉢の崩部に、乾燥時のヒビ割れを密着させることにより補修するため、内面から紐を貫通させ、外面で結んだものが出土している。

いずれも、土器製作に関して一定の技法を指示するもので、今後、注意が必要な資料提供となろう。

#### 5 焼成粘土塊について

縦文時代晩期と古代において、それぞれ焼成粘土塊が出土している。その時期についてはやや不安はあるが、焼成粘土塊が出土したことによって、本遺跡内の土器製作の可能性を考えさせられるものである。焼成粘土塊とそれぞれの時期の土器胎土（肉眼観察）を比較したが、特に違和感はなかった。他方、砂礫を多量に含むことにより、器面にヒビ割れのみられるものや金色の雲母を含む個体が少量存在することを記しておきたい。

（引用・参考文献）

志布志町教育委員会『川久保A遺跡』埋蔵文化財報告書（11）1986

鹿児島県教育委員会『櫻木原遺跡』埋蔵文化財報告書（44）1987

国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第26号1990

鹿尾慎一郎『西部九州の斜肩円筒形土器』

肥後考古学会『父祖の考古学 三島格会長古希記念 肥後考古』

第8号1991 桥辺誠『組織痕土器研究の諸問題』（注1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター『櫻崎B遺跡』発掘調査報告書（4）1993

加世田市教育委員会『T何原遺跡』発掘調査報告書（13）1995

鹿児島考古学会『鹿児島考古』第39号1995

東和幸『弥生時代の煮沸土器に被状口縁がないのはなぜか』

阿佐ヶ谷先史学研究会『先史考古学研究』第6号1996

坂口一『削目焼将文土器の成立』

地岡清子『縦文の衣—日本最古の衣を復元』1996学生社

北陸古代土器研究会『北陸古代土器研究』第7号1997研究ノート

小林正史『炭化物からみた弥生時代の漆の使い分け』

鹿児島考古学会『鹿児島考古』第31号1997

堂込秀人『南九州縦文陶器土器の再検討—入佐式と黒川式の鑑分—』

第1表 土器觀察表





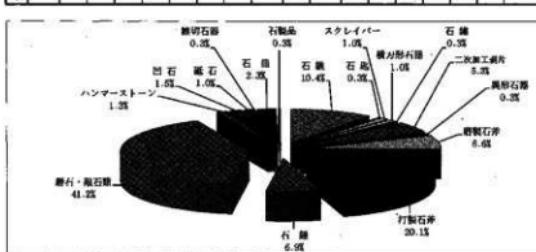


第4表 石器観察表

発見場所	出土区	層	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
第4回	438 6-B	Ⅲ	石 鋸	安山岩 (9341)	2.1	1.7	0.5	0.84	-零辺三角形の長身タイプで、底辺は深く抉れている。
439 11-B	Ⅲ	石 鋸	チャート	2.2	2.0	0.5	2.07	-二種辺三角形の長身タイプで、底辺は抉れていない。五角形タイプの可能性は残る。	
440 25-C	Ⅲ	石 鋸	安山岩 (9341)	2.4	2.2	0.5	1.04	-等辺三角形タイプで、底辺は浅く抉れている。若干、大形か	
441 5-B	Ⅲ	石 鋸	チャート	2.3	1.5	0.3	0.82	五角形のタイプで、背面が上辺にあり、脚部方向へ尖点が付いたりとなる。底辺は浅く抉れていない。	
442 10-B	Ⅲ	石 鋸	安山岩 (9341)	2.6	2.1	0.4	1.51	五角形のタイプで、脚部が上辺にあり、脚部方向へ尖点が付いたりとなる。底辺は浅く抉れていない。	
443 10-C	Ⅲ	石 鋸	チャート	6.5	4.4	1.2	30.42	片側の右端に後段の再加工品か、比較的粗雑な調製である。つまみ部の抉り部は15mmを測る。	
444 4-B	Ⅲ	スクレイパー	粘板岩	7.1	7.4	1.9	66.31	先端部は、片側から細い刃部が加えられ、側面の片削は、両面から調製が加えられている。	
445 10-A	Ⅲ	石 鋸	チャート	3.5	1.7	1.2	8.85	先端部は細く加工しているが、つまみ部は、両面とも自然面が残っている。	
446 一括	Ⅲ	2次加工片削	閃雲石 (9341)	2.8	3.1	1.2	9.49	洞片の周縁の片削が細く加工されているが、つまみ部は、両面とも自然面が残っている。	
447 15-B	Ⅲ	直 機刀頭石器	直机 (9341)	4.6	9.7	1.7	102.38	直機刀頭石器の加工をしたものの、刃端部両面から加工されている。	
448 GT	Ⅲ	直 機刀形石器	直机 (9341)	3.6	6.4	7.0	12.27	直機の刃端部に複数している。刃部は両面から加工されている。	
449 1-2 一括	Ⅲ	異 形石器	(三枚)	4.7	2.5	1.4	10.81	刃端部を加工して三日月となる。直機形のものだが、刃端は鋒。つまみ部の抉り部は5mmを測る。	
450 3-B	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	13.7	5.8	3.5	405.30	万葉は欠けている。刃部、基部とも丁寧に磨いているが、大部分は自然面を残している。表面に施設がある。	
451 10-1	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	11.3	5.1	2.6	167.69	刃部は丁寧に磨いていたが、刃端部は一部欠けている。	
452 2-B	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	8.1	4.2	2.5	11.52	刃端部は、刃端部に刃端部が付いている。	
453 10-1	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	8.1	4.7	2.0	122.84	直機と同様に刃端部に刃端部が付いている。刃部は両面でもある。	
454 1-2	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	8.6	8.2	3.1	326.34	直機・側面とも刃端部に刃端部が付いている。刃部は両面である。	
455 1-2 一括	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	7.2	2.7	1.3	43.33	直機・側面とも刃端部に刃端部が付いている。刃部は両面である。	
456 11-A	Ⅲ	磨 刷 砂	頁岩	6.6	2.3	1.0	21.95	刃端部による。明瞭な刃端部はみられないが、刃部を基部には、削痕が跡としている部分もみられる。刃部のミ形である。	
457 一括	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	13.7	4.4	1.9	140.32	直機形で、刃端部を細くし欠けている。	
458 4-C	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	9.5	5.2	1.2	11.52	直機形で、直機側面から加工されている。刃端部は3mmを測る。基部の可能性も残る。	
459 4-C	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	9.0	5.0	1.2	109.04	直機形で、刃端部を細くし欠けている。刃端部は4mmを測る。	
460 5	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	13.4	7.3	1.6	164.31	ラケット形(直機タイプ)で、刃端部は4mmを測る。	
461 3-A	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	13.1	7.0	1.9	183.82	ラケット形(直機タイプ)で、刃端部は4mmを測る。	
462 11-B	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	10.1	8.2	1.7	142.74	ラケット形の内加工品か。跡跡部は5mmを測る。	
463 5-B	Ⅲ	打 刷 砂	(鉄/7.5mmか)	9.0	8.5	0.9	117.88	ラケット形で、磨かれている部分もある。抉れ部は4mmを測る。	
464 3-B	Ⅲ	打 刷 砂	(鉄/7.5mmか)	9.0	6.1	1.4	74.95	ラケット形で、刃端部は4mmを測る。	
465 11-C	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	6.7	6.8	1.9	84.73	直機形で、刃端部は3mmを測る。	
466 25-C	Ⅲ	打 刷 砂	直机 (9341)	11.8	8.9	2.1	163.04	直機形で、刃端部は3mmを測る。	
467 5-B	Ⅲ	石 鋸	砂岩	4.0	3.7	1.5	31.01	刃口下部で、欠損後に刃端部を打ち替えていたものが、難離である。抉れ部は斜面による、刃端しがらみられる。	
468 13-B	Ⅲ	石 鋸	砂岩	3.8	5.2	2.2	56.49	刃口下部で、主に正面を打ち替えていた。抉れ部は刃端部が3mmを測る。	
469 13-A	Ⅲ	石 鋸	砂岩	3.6	3.9	1.9	31.56	刃口下部で、小さく周囲から打ち替えていた。抉れ部は刃端部が4mmを測る。	
470 9-E	Ⅲ	石 鋸	砂岩	5.1	5.3	1.5	58.74	刃口下部で、両面から打ち替えていた。抉れ部は刃端部が4mmを測る。	
471 9-B	Ⅲ	石 鋸	頁岩	4.5	6.6	2.3	98.51	刃口下部で、刃端部を打ち替えていたが、片側が大きく削離している。抉れ部は刃端部が3mmを測る。	
472 2-A	Ⅲ	石 鋸	砂岩	3.2	4.0	2.0	22.70	刃口下部で、両面の技術的上、研削のための削痕はみられないが、ズレしている。	
473 5-B	Ⅲ	石 鋸	砂岩	4.1	5.5	1.6	50.86	刃口下部で、刃端部の抉れ部に研削のための削痕がある。	
474 2-B	Ⅲ	敲 砕	砂岩	5.0	5.0	4.1	127.27	片端と側面と砕石として使用している。	
475 13	Ⅲ	敲 砕	砂岩	12.1	9.2	4.9	813.10	両側面の両端を、砕石として使用している。	
476 6-B	Ⅲ	敲 砕	砂岩	5.4	5.0	2.2	84.21	両側面の両端を、両面砕石として、側面は砕石として、使用している。	
477 10-B	Ⅲ	敲 砕	砂岩	10.1	8.5	4.7	567.65	両側面の両端を、砕石として使用している。	
478 8-B	Ⅲ	ハンマーイスト	砂岩	3.5	4.5	2.5	49.49	両側面の両端を、砕石として、側面は砕石として、使用している。	
479 10-B	Ⅲ	敲 砕	砂岩	11.1	8.5	4.7	101.11	両側面の両端を、砕石として、側面は砕石として、使用している。	
480 ST	Ⅲ	敲 砕	砂岩	7.0	9.6	2.6	200.09	両側面に削痕がみられる。片面は明瞭な新砥石である。	
481 10-B	Ⅲ	敲 砕	直机 (9341)	11.9	3.7	3.1	248.14	両側面に削痕がみられる。片面は明瞭な新砥石である。	
482 9-B	Ⅲ	円錐状石製品	凝灰岩	9.3	5.2	1.9	90.32	本來、精巧内面であったことを考えられる、石製品である。周辺は取りきされている。鉄矢(延11mm)を測る。	
483 22-C	Ⅲ	石 直	安山岩	18.3	26.5	7.2	4890.00	大型の石直である。片面と側面に側面が認められる。	
484 3-B	Ⅲ	擦 刀 滴	砂岩	7.5	4.0	0.7	29.57	両面には、つまみ部が削離していない部分も存する。厚さは最大厚7mmと薄く、石端部が挫滅する。	
485 1-B	Ⅲ	擦 刀 滴	珪質頁岩	4.6	1.8	0.3	2.88	削痕により約10mmの削痕がみられ、得度である。基部側面に削痕があり、弥生時代の石刀か。	

第5表 石器組成表

器種	石 鋸	石 鋸	ス タ イ リ バ ー	石 鋸	石 鋸	石 鋸	石 鋸	石 鋸	石 鋸	合 計
出土量	41	1	4	4	1	21	1	20	27	300
出土率	10.4	0.3	1.0	1.0	0.3	5.3	0.3	6.6	12.3	30.0



第6表 土師器・須恵器觀察表

番号	品目	出所	層次	色調	施上	外面調整	内面調整	口部	底盤	参考
488	土師器(鉢)	22-1	I	良好	高白色、灰白色、黃白色、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	14.7 (17.4) 15.0	14.7 (17.4) 15.0	外側に細かな凹凸があり、表面外側に薄い白粉を吹き付けてある。内側は外側と比較して滑らかで、白粉が吹き付けてある。
489	土師器(鉢)	22-1	I	良好	淡黃褐色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	8.6	8.6	内側白、外側へ吹き付けてある。内側は吹き付けてある。
490	土師器(平)	22-1	I	良好	淡黃褐色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	6.1	6.1	内側白、外側へ吹き付けてある。内側は吹き付けてある。
491	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	(7.9)	(7.9)	内側は吹き付けてある。外側は吹き付けてある。
492	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	9.1	9.1	内側は吹き付けてある。外側は吹き付けてある。
493	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	9.6	9.6	内側と外側とも吹き付けてある。底盤にお白粉を吹き付けてある。
494	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	9.1	9.1	内側と外側とも吹き付けてある。底盤にお白粉を吹き付けてある。
495	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	9.1	9.1	内側と外側とも吹き付けてある。底盤にお白粉を吹き付けてある。
496	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	9.1	9.1	内側と外側とも吹き付けてある。底盤にお白粉を吹き付けてある。
497	土師器(鉢)	22-1	I	良好	青色、綠色、白石、青色、綠色	白粉ナゲ 白粉ナゲ	白粉ナゲ 白粉ナゲ	12.5	12.5	内側と外側とも吹き付けてある。底盤にお白粉を吹き付けてある。

第7表 土師焼・土製品觀察表

番号	出所	物種	形状	地色	成形	色調	施上	外面調整	内面調整	備考
498	土師器(鉢)	22-D	I	良好	青色	石英/長石多い、角閃石/輝石多い、砂礫多く、黄白色	白ケ、ナゲ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	外側に繊維状斑紋(1本)、内外面
499	土師器(鉢)	22-D	I	良好	淡黃褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
500	土師器(鉢)	21-D	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
501	土師器(甕)	22-D	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
502	土師器(甕)	一括	I	良好	青色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
503	土師器(甕)	4-A	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
504	土師器(甕)	4-B	I	良好	淡黃褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
505	土師器(甕)	9-9	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
506	土師器(甕)	22-D	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫多い、黃	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
507	土師器(甕)	22-D	I	良好	淡褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
508	土師器(甕)	22-D	I+II	良好	米褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫多い、黃白色	白ケ、ナゲ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
509	土師器(甕)	22-D	I	良好	茶褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫多い、黃白色	白ケ、ナゲ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
510	土師器(甕)	22-D	I	良好	淡褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫多い、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
511	土師器(甕)	21-E	I	良好	褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
512	土師器(甕)	22-D	I+II	良好	茶褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫多い	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
513	土師器(甕)	22-D	I	良好	淡褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
514	土師器(甕)	3T	I+II	良好	茶褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫、黃白色	白ケ	白ケ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
515	土師器(甕)	22-D	I	良好	茶褐色	石英/長石多い、角閃石/輝石、砂礫多い、黃	白ケ	白ケ、ナゲ	白ケ、ヘラケズリ	内側白化。内側内面も白化。内側内ガキ
516	燒成粘土塊	22-E	I	良好	茶褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫、黃白色				長径57mm、短径34mm、砂礫(最大8mm)、種子状柱狀、ビビアリ、クレーラー、火照れ状斑紋(火照れ跡)
517	土 粘 表模	一括	良好	青褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫、赤色粘、茶色粘	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	内面取り、繊維状斑紋(火照れ跡)、火照れ柱状斑紋(火照れ跡)、火照れ柱状斑紋(火照れ跡)
518	土 粘 表模	一括	良好	赤褐色	石英/長石、角閃石/輝石、砂礫	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	内面取り、繊維状斑紋(火照れ跡)、火照れ柱状斑紋(火照れ跡)、火照れ柱状斑紋(火照れ跡)

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(27)

# 小 迫 遺 跡

発行日 1998年2月

発 行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号)

印刷所 志布志印刷有限会社(鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2)